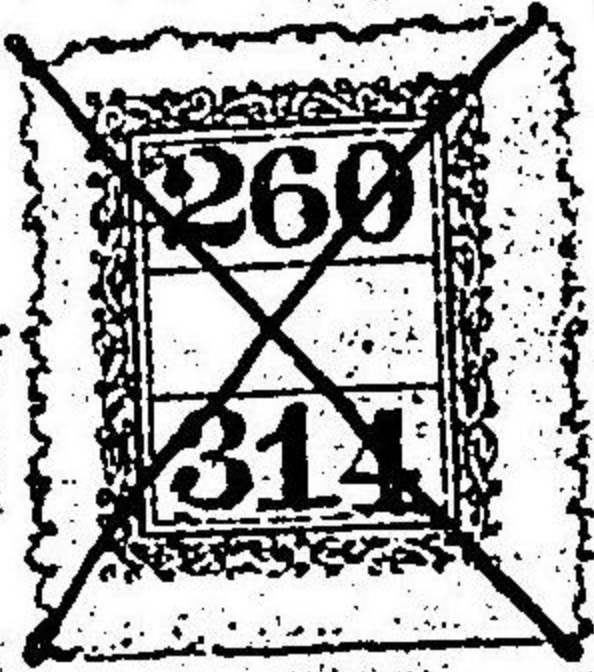


田貝定太郎著

# 精神界之統一

一名全壹神道論



特21  
584



皇太子殿下  
山陰行啓を紀念し奉る

著者謹みて此書を獻じて

明治  
42 8 26  
内空

田貝宛太郎

井上塔次郎

元日 第一卷

三卷 第二卷

惟「権宗」は、（？）

延引「権宗」は、（？）

能常「権宗」は、（？）

廿「権宗」は、（？）

郷美「権宗」は、（？）

小者「権宗」は、（？）

解論「権宗」は、（？）

関文「権宗」は、（？）

其「権宗」は、（？）

只「権宗」は、（？）

拜啓精神界之統一ト題スル書冊井上博士  
ヨリ廻送有之候ニ付大臣ノ御覽ニ入レ候  
處一應披見ノ上御苦心ノ段德育界ノ爲メ  
謝スト申傳ヘラレ候仍テ別冊御返付旁小  
官ヨリ御挨拶迄如此ニ御座候 敬具

明治四十一年二月二十九日

文部大臣秘書官 赤司鷹一郎

田貝定太郎殿

拜啓客月者御郵送之貴著精神界之  
統一主人之閱覽ニ供シ候處熱心ナ  
ル御研究精神教育之爲メ多トスル  
處ニ有之候旨申進候様被申聞候別  
冊返戻旁右得貴意候敬具

九月九日

公爵山縣有朋

家扶

田貝定太郎殿

著者嚮きに此書原稿を士友團理事高橋靜虎先生に送り其批正を請ひたるに、同先生は之を吾人が日本精神の權化として欽仰措かざる乃木大將閣下の電覽に供せられ、圖らざりき同大將の親しく批閱の榮を與へ給はんとは、吾人は今や旗上げの首途に當り斯る至大の聲援を得たるを以て、轉々金剛山の園既に解けたるの思ひなくんばあらず、出版に際し謹んで右の批點を其儘に上梓することゝなしぬ、行間の●點及欄外の園點等は是なり。

他の評語及批點は其後井上博士の與へられたる所に係る。

## 檄文

檄して天下の志士仁人に白す。日露戦争の終局せし今日は、果して真正に平和の世なるか、之れを然りとなすものは是近眼者流のみ。請ふ刮目して我國の精神界を一瞥せよ、實に之れ元弘建武以上の大亂脈にあらずや、憂世の士豈一日も苟且偷安すべけんや。吾人洵に淺學不才、加ふるに鷲鈍の資を以てするも、孤忠敢て身を挺んでて義兵を擧ぐ。

精神界の戦闘は其争や君子ならざるべからず。之れに用ふるの武器は素より銃砲彈藥にあらず、刀劍弓矢にあらず、悪口雜言にあらず、讒謗罵詈にあらず反目嫉視にあらず、理屈と多言ともあらず、唯這の宏量にあり、唯這の愛にあり、無限の宏量絶對の愛、最後の勝利は唯此の武器の下に来る。吾人は我國家固有の大道が此最良の武器たるを信じ、茲に微軀を以て常勝軍の急先鋒たらんとす。

願くは四方同志の諸君、奮ひ起て吾人の舉を賛け給はんことを。且先進大方の士の吾人の衷を諒とし、吾人を教へ吾人を率ふるに吝ならざらんことを祈る。

明治三十九年八月慈母病氣看護の間

著者識

一、本書は、昨夏以來母重病に罹り、苦心慘憺の間、桑原氏の精神靈動を讀んで大に感ずる所あり、予が信仰を告白せんと欲し、即本年一月九日より閑を偷みて起稿し、七月十五日脱稿、會て東久世伯爵の一覽を仰げり。

一、吾人の立ち場は、會て博士井上哲次郎先生の「心學叢書の跋」に勵まされ私かに明治に於ける心學者の徒たらんことを期す。

一、本書撰述に就きては、吾友近藤壽一郎君の多大なる奨助を與へられたるを感謝す。

明治三十九年八月



精神界之統一目次

一、	緒言	一
二、	精神界の一新	二
三、	我國現下の精神界	三
四、	一般人心の歸着點	四
五、	精神界に對する日本の位地	五
六、	日本國家の天職	六
七、	儒教	七
八、	佛教	九
九、	耶蘇教	一一
十、	日本固有の教 神道	一二
十一、	神道黑住教	一四

十二、天照る神なる思想……………二〇

十三、二宮尊徳翁の報徳教……………二三

十四、明治聖代に於ける精神界の沿革……………二四

十五、大道社……………二五

十六、日本主義國教論……………二六

十七、無神無靈魂説……………二八

十八、天人論……………二九

十九、精神靈動……………三〇

二十、佛敎國とは何ぞや……………三三

二十一、神國とは何ぞや……………三五

二十二、神道は祭天の古俗なり……………三七

二十三、報本反始……………三九

二十四、如來は無上法皇なるか……………四〇

二十五、一大催眠術……………四二

二十六、神道と佛道との比較……………四四

二十七、各敎の通弊……………四六

二十八、靈魂論……………四八

二十九、同……………四九

三十、同……………五二

三十一、靈界とは何ぞや……………五四

三十二、想像せられたる靈界……………五八

三十三、同……………六〇

三十四、永生……………六三

三十五、宗教とは何ぞや……………六五

三十六、一大熔鑛爐……………七〇

三十七、全壹神道……………七二

三十八、國民の自覺……………七五

三十九、明治維新の鴻業……………七八

四十、教育と宗教……………八〇

四十一、軍隊の精神教育……………八四

四十二、武士道とは何ぞや……………八六

四十三、世界的教義……………八九

四十四、同……………九三

四十五、全壹神道の布教法……………九七

四十六、大教の綱領……………九八

四十七、大教の宣傳に就て……………九八

四十八、自省……………一〇〇

餘論……………一〇一

附録……………一〇五

教育勅語祭設定の議に就て……………一〇五

教育勅語身讀論……………一〇六

近藤雄四郎君を弔す……………一二二

敢て兩本願寺に勸む……………一二五

讀史偶感……………一二六

## 精神界之統一



開闢以來未曾有の大事業たりし卅七八年戦役は、上、我叡聖文武なる天皇陛下の御陵威と、下、忠勇無比なる陸海軍人諸君の働きとを以て、海に陸に連戦連捷、遂に強大なる敵國に對して開戦當初の目的を達し、平和茲に來り、國運は一躍して世界の一等國となれり。今や茜さす日の御旗は、新に東洋の雲霧を晴して、其偉大なる光輝を全地球に向て投射し來れり。吾人國民たるもの生れて此盛時に遭逢す、嗚呼何ぞ多幸の極みなるや。今や世は時局の聲に代ふるに戦後經營の聲を以てし、東郷大將の所謂勝て兜の緒をしむるの覺悟を忘れず、社會の各方面に於て等しく發展的施設に務む、嗚呼是れ戦勝の天佑に對する國民の最大報謝と謂ふべし。

茲に吾人は人心の新に天佑を感得し來れる時に當り、謹で我國精神界の一新を提唱し、以て聊か盛時の天恩に酬ゆる所あらんとす。

## 二 精神界の一新

舉國一致と云ふことは、此度の戦役に於て、我國が小よく大を制して全勝を得たる最大原因なり。世界に邦國は多けれども、開闢以來の歴史を同ふし萬世一系の皇室を載ける大和民族は、無事の時こそ各自相互の恩怨競争もあれ、一旦事ある時は、直ちに旭旗の下に最堅き忠君愛國の一團塊となる、是實に我國の特色にして天佑の存する所茲にあり。

既に此特色あり、此特色さへ失ふことなければ、國運の隆盛は皇祖の神の神教通り疑ひあるべからず。されば我國の政治法律も教育宗教も、皆此特色を扶持發達するを最後の目的とせることにして、現在の制度文物は此點に向て聊かも不安なることなし。

然り不安なることなしと雖もそれは消極的なり、今や積極的に此特色に於ける眞正の生命を發見せんとす、精神界の一新は則ち是れによる。

## 三 我國現下の精神界

現今我國に於ける精神界の状態は如何、心眼を開て一觀し來れば如何に樂天觀の人士と雖も、其状態の餘りに混沌亂雜なるに一驚を喫せざるを得ざるべし。唯「過渡の時代」なる宥恕の下に、哲人も學者も憂世の士も、之れに驚くの度を鈍くせるものゝ如し。

それ神道家は「日本は神國なり」と云ふ傍に、佛教者は「日本は佛教國なり」と云ひ、儒教の流風あり、陰陽五行説の遺傳あり、西洋思想の流入によりて哲學あり科學あり、拜金主義あり本能満足主義あり、而して耶蘇教は比年其勢力を新進青年の間に擴張しつゝあり。此等の各教は又各數宗數派に分裂し紛々として風に揚れる木の葉の空中に舞ふが如し。

固より信教の自由は憲法の確保する所なれば、人心の勝手次第何教を信ずるも信ぜざるも随意なれども、かゝる亂雜なる精神界の現象は、其儘社會の外形に表顯して、國民品位の卑下となり、社會教育の不良となり、文明進歩の邪魔となる、更に最も厭ふべきは一般人心の歸着點を危くするの恐れあること是なり。

#### 四 一般人心の歸着點

我國精神界現時の有様既に此の如く、社會の教權なるものなきが故に、從て社會の制裁力薄弱に、社寺及協會の勢力強からざるが爲めに、社會教育の機關大に其用をなすこと能はず、滔々たる世人は牧者の索より逸したる羊群の四散せるが如く、茫々洋々として歸着する所なし。此間に於て流石キリスト教だけありて、文明國に磨き上げたる布教法により、收穫多き野に立てる工人の如く堂々として福音を宣傳す。人心特に新進の青年の、漸次其教を奉ず

るに至れるは固より怪しむに足らず。

教育の進歩は明治聖代の最大なる誇なり、戰勝の光榮も是によれるは世既に定論あり、然れとも進歩せる教育は唯學校教育のみ、社會教育に至りては尙今日の一大欠陥に屬す。

忠君愛國は我國一般人心の歸着點にして、其有事の日に於て其勵を表はせるは既に謂へる所の如し。然りと雖も精神界の混亂其日久しき時は、或は漸次此歸着點に幾分の動搖を來すの恐れなきか。

#### 五 精神界に對する日本の位地

吾人ば茲に翻て世界の精神界に對する我國の位地を考査せんとす。精神界の現状に就て多くの悲觀に沈みかゝりたる予は、本項の考察によりて非常なる樂觀に復り來らんとす。

夫れ我國は東海の表に獨立して、東洋文明と西洋文明との湊合する接觸點に

位せり。而して不思議にも一波一波打ち寄せ来る各種の教が、何れも皆我國に於て榮えざるはなし。是れ氣候風土の中正を得たるによるか、國土山川に自然の美を具ふるによるか、抑人心の先天的に優勝なる所あるか。それ儒教來れば本國の支那よりもよく行はれ、佛教來れば本國の印度よりも盛んになり、西洋文明を輸入して四十年間、既に比肩して駢進せんとす。我國精神界の現状を一方より考ふれば、天は自然に我國に於て各種色彩を異にせる各精神の展覽會を開きたるが如し。其撰擇取捨は其任全く吾人國民に在るか。

## 六 日本國家の天職

數年前我郷伯耆國根雨に於て、敬友近藤壽一郎氏によりて組織せられし青年懇話會の席上に、予は予が信條を告白して曰、

日本國家は之れを譬ふれば一枚の白紙の如し。儒教來て一種のインキにて畫

余亦信之

き、佛教來て又他色のインキを抹し、開國以來西洋の哲學科學によりて彩られ、耶蘇教によりて染められんとす。今や日本の白紙は全く一枚の書とも畫ともつかぬ反古紙となり了りたるの觀あり。嗚呼我國の精神界は全く此亂雜なる反古的状態に永く止まるべきか、曰否、予は信ず、遠からざる將來に於て、各種の教を陶冶融合せる一大眞理の光輝となりて、獨り我國のみならず、全世界の精神界を光照すべき教を出さん。而して其教や日本固有の最淡々しき白紙的素色に合一せられん、蓋世界の精神統一は是我國家の天職なり。と、それ潮流の寒暖相接する所に魚屬海草の最よく繁生するが如く、東西文明の接合點たる我國は、眞理の光を發するの最好適地と謂はざるべからず。況んや上天既に世の始より或使命を寄與せらるゝあるをや、以下次を逐ふて各種の教に對して検討を加へんとす。

## 七 儒教

天と謂ひて神と謂はず、現世を説いて未來を説かず、人道を言ひて天道を言はず、世間を言ひて出世間を言はず、修身を説いて祈禱を説かず、最常識に富めるものを孔子孟子の教となす。

故に人、儒教は宗教にあらずと云ふ。彼や教の尤情的に發達せるものなり。儒教の我國に入るや、仁義五常の説によりて、我國に自然に行はれつゝありし忠孝の大道に、學問の根據を與へ、近く維新の後までも最強く士人の心を支配し、其我國の精神界に貢獻せし所幾何なるを知らず。今や新思想の發達によりて其位地を失墜せしも、尙教育勸語の内に生きて、學校教育に其主要部分を活用せられつゝあり、彼や決して死したるものにあらず。

然り死したるものに非ずと雖も、其死せざるは其精神の主要部分のみ、其形體に至りては既に土崩瓦解せり。

勿論専門有数の學者に至りては、尙社會の尊敬を保ちつゝあれど、其以下に至りて漢學者と云へば、一時殆ど固陋の代名詞とせられ、村夫子道學先生と

して社會の外に消え行き去れり、是を今日儒教の状態となす。

## 八 佛 教

幽玄深奥の哲理により、廣大無邊の大想像力を振ひ、經に三世を極め、緯に十方に亘り、因縁果報を明らかめ心境一如を觀じ、三寶四恩五戒六道、悟れば則一切空となり、空即是色色即是空、即身成佛婆婆即寂光淨土、有無善惡物心生死一切の差別は是平等、平等是差別、一にして二二にして一、宇宙全一眞如の實相を擧げて、之を南無阿彌陀佛に歸するもの、之を釋迦牟尼の佛教となす。精神研究の大家桑原俊郎先生は、佛教を以て宇宙心理學と謂はる寔に故あり。

正知正見を立て無明の煩惱を拂ひ、心眼豁然眞理の光明に安住して十方無碍なるを得るもの、世間何物か佛教の教理に優るものあらん、彼や教の最知力的發達を遂げたるものなり。



佛像の一旦難波の堀江に洗禮を受けて我國に入りしより、一時多少の弊なきにあらざりしも、日本文明は頓に一段を進めて、人心の根本に安心立命を與へ、其知力を進め其道徳を進め、併せて美術工藝の進歩を來したるもの幾何ぞや、吾人は佛教に向て多くの感謝を捧げざるべからず。

然りと雖も我國今日佛教の状態を達觀すれば、或一部分を除くの外は最早人心の支配權を失却したるものなり。勿論其教理の眞生命は元より不生不滅なり、左れど其宣傳の組織は殆ど教の眞生命を枯らさんとす。

念佛や、題目や、座禪や、讀經や、木魚や、數珠や、焼香や、圓顛や、法衣や、元より或一部には生命を保つべきも、國民の全般に對する有りがた味は最早過去の夢に屬せり。今や社會は多數の僧侶を偶像の看守人、葬式佛事の營業人として視つゝあるなり。宗教家は其知徳に於て一般より遙かに進歩し居るべき筈のものが、今や却て普通人よりも退歩したる迷信的知識を保守して頑として達見を氣取れるものは僧侶に多し、是教理の生命を枯らすものに

非ずして何ぞや。

## 九 耶蘇教

西洋の文明に伴ひて發達し、能く其文明を扶掖して社會の道徳を維持し、世人を罪惡より救済し、文明各國共通の尊信を保ちつゝあるものは耶蘇教なり。學校、病院、孤兒院等の施設に務め、貧民救済、監獄改良其他あらゆる救世、慈善、感化の活事業を經營し、世の光となり、地の鹽となれるものは耶蘇教なり。

其協會と云ひ、讚美歌と云ひ、祈禱と云ひ、説教と云ひ、教師牧師と云ひ、日曜毎の集りと云ひ、信徒の家庭と云ひ、相互の交際と云ひ、其方法の文明的にして活生命あるは耶蘇教の福音傳導なり。

耶蘇の教は獨一眞神、獨一神子、聖靈の三位一體を認め、祖先以來の罪惡を悔い改めてイエスの御名に復活し、限りなき生命に入りて來らん時の地獄の

苦を免れ、天國の主なる神の榮光に浴すべしとなす、平等、博愛、平和、自由の思想は多く此教より來る。

有史以來其人の詳かなる言行によりて其人を想像し得べきもの、中にて、其人格の高峻偉大なるもの、イエスの右に出づるもの稀なり、故に其教や最も意力的に發達す、

かゝる教祖を獨一神子とせるは無理なきことなれども、獨一とは如何にしても眞理の前は勿論、佛教の前にすら破れざるべからず。吾人は耶蘇を尊信するものなり、左れど此教も亦決して神の全部にあらざるなり。

## 十 日本固有の教、神道

神道は日本國體の精華なり。

人或は神道は一の儀式にして宗教にあらずと云ふ。故に今日宗教の事を論ずるもの、往々神道を論題以外に置くもの多し。

は無理ならぬことなり。神道は神道家の所謂神隨……自然發達の教にして、別に他教の如く取り出でたる教祖を有することなきが如く、別に教理として立てられたることなく、經典と云ふ程のものなく、至て淡々泊々たるものゝ如し。

故に普通人の常に謂へることに、僧侶には難行苦行あれども、神官には其事なし、從て僧侶には知識多く神官には學力なしと。

神道は祖先教なり、多神教なり、太陽教なりなど謂はる、是吾人が後章に於て大に論ぜんとする所なり。

抑神道は大和民族の間に自然に發達せし、敬神の念即是にして、彼の佛教が長の年月流行せし間にも、遂に之を奪ふこと能はず、利巧なる高僧たちをして、却て佛を神に付帶し、本地垂跡の説を以て其敬虔の半部を横領せんと企てしめたる所以なり。

維新の改革により、神佛全く正當なる分野に復りたるが、今の神道家及神官

「校」

は、司掌の神社に奉仕するの外、教導職としての活動は殆ど絶えて、却て祈禱の間などに國民の迷信を利用しつゝあるに非ざるか。神道家の他の缺點は、古式古禮を過重するにあり。孔子告朔の餼羊を惜む、況んや我國柄に於て古禮式の保存素より必要なり。然りと雖も其極社會の改良進歩と矛盾するものをも顧みざるは弊なり。神道の流派も甚多し、吾人は其中に就て、茲に世人の多く注意せざる黒住教の檢覈を行はんとす。

### 十一 神道黒住教

徳川幕府の末葉に於て、備前御津郡の神職黒住宗忠翁、神道の精神によりて一派の教を立つ、之を黒住教となす。其教旨は天照大神を以て宇宙の親神となし、各人各個は其分靈を得て心となし其分身を得て身となす、故に人は其身其儘天地と一體にして只小大を分つ

のみ、迷へばこそ神人の別を立つれ、小我を離れて大觀すれば今も即神代なり、迷は魔寄りなり、迷ふが故に疾病其他の苦惱罪惡を生ず。神の道により我を離れて修行すれば、病の直るは「いろは」にして、進んで徳を天地神明に合することを得、是大神の道なりと。其教條として七ヶ條なるものあり

日々家内心得のこと

- 一 神國の人に生れ常に信心なき事
- 一 腹を立て物を苦にする事
- 一 己が慢心にて人を見下す事
- 一 他人の惡を見て己に惡心ます事
- 一 無病のとき家業怠りの事
- 一 誠の道に入りながら心に誠なき事
- 一 日々有りがたかきこと取り外す事

右の條々常に忘るべからず恐るべし恐るべし。

立ち向ふ人の心は鏡なり。

おのが姿をうつしてや見ん。

又三十箇條なるものあり。

- 一、誠を取り外すな。
- 二、活物をつかまへよ。
- 三、陽氣になれ。
- 四、我を離れよ。
- 五、自然に任せよ。(以上を五事の教と云ふ)。
- 六、心は大磐石の如くおし鎮め、氣分は旭の如く勇しくせよ。
- 七、無慾になれ。
- 八、無念になれ。
- 九、足ることを知れ。
- 十、天のおあてがひを大切に勤めよ。
- 十一、赤子になれ。
- 十二、慢心を去れ。
- 十三、人智を去て天に任せよ。
- 十四、取越苦勞をすな。
- 十五、臆病を去れ。
- 十六、念を繼ぐな。
- 十七、善人の罪を作るな。
- 十八、何事も活し上手になれ。
- 十九、難有り有り難し。
- 二十、陰氣を去れ。
- 廿一、御分心を傷めな。
- 廿二、邪陽になづむな。
- 廿三、心のかどを取れ。
- 廿四、怠らず御陽氣を吸へよ。
- 廿五、下腹で息をせよ。
- 廿六、不足が起きたら裸で生れ

た昔を思へよ。廿七、毎朝々々生れ變つた氣で日拜をせよ。廿八、臆病と疑が去らぬと御蔭は受けられぬぞ。廿九、活物は息するものと云ふことにて、人物は勿論鳥畜類に至るまで、天照神の御神徳が二六時中鼻と口より通ひ給ふ故生きて居らるゝ、なんと有り難い尊いことではござらぬか。三十、迷は魔寄と申して人の心が迷ふ時は、其虚へつけ込んで悪魔がより集りさまゝの因果たゞりをいたす、油断はならぬぞ。

天照大神に對する祈禱文の一に曰、

掛卷も畏き天照皇大神の御前に謹み慎み申さく、人は即天が下の御靈物なり、静め鎮まることを司るべし、心は即神と神との本のあるじなれば、心をな傷めずして水と火とに類ひし正しく直き元の心は、大御神の御心と一つなり、一つにならんには、我を離れ天に任せ、生き生きて無きを養ふを誠の人と申すなり、誠は大御神と隔てなき生き通しなりと、教の御祖の教へ導き給ひし嬉しさを敬ひ尊び稱へごと畢へまつらくを、平らけく安らけ

く聞しめし幸ひ給へ云々

宗忠翁は天性至孝の資を以て壯歲重患に罹り、瀕死の苦惱中に一旦豁然天照大神の靈光に感じ、天命直授を確信して自ら癒し又能く人を救ふに至れり。其教法は祈禱と説教とによりて人の信を導き、病者に對しては、まじなひとて撫でさすり息吹き拂ひなどして（曰、まじなひは附木で火を附くる様なものと即人の信仰を喚起するを謂ふなり）信仰によりて疾病を治するを期す、今の催眠術治療の高尙なるものなり。

黒住が赤い顔して黄な聲、

青い講釋しるうとが聞く。

是れは黒住教を淺薄とせる一部の思想を代表せるものなるべし。然り今日の所謂黒住教の先生たちの説教を聞くと、無暗に御蔭と有りがたいの一天張で、普通の知識あるものには耳に蓋をせねばならぬこと多し。是れ此教が世上有力なる人士より迷信部類に葬らるゝ所以なり。

此教が疾病治療に奏効せし點あるは創見として、其教義の大部分は全く佛教の哲理より悟入せしものなり。宗忠翁の講話を纂めたる天道至誠講義なるものを見るに、全く神道の精神を以て佛教の哲理を敷衍せしもの如し。然り其思想は佛教より悟入せるにせよ、此人は確かに所謂宗教上の天才なり、青い講釋とは淺薄を意味せるなるべきも、道は近きにあり。特に道念上至要の觀念を取つて之れが解釋をなすに當り、殆ど滑稽的に卑近の説明を與へ、而も動かすべからざるもの多し、左の數者を見よ。

誠は丸事なり。眞心は丸き心なり。道はみちみつるなり。人は口止なり、穢とは氣枯なり。迷は魔寄りなり。難有り有りがたし。まじなひは心に交りなきぞ。生物は息するものなり。等

其道歌の二三を録せば、

身も我も心もすて、天地の、たつた一つの誠ばかりに、  
我がわれと思ふ此身も天の我、我物とては一物もなし。

心から生きられもする死ねもする己が命は己が儘なり。」  
明日のこときのふの事に亘らずに只今橋を渡れ世の人。」  
有り難い〜とて世に住めば有りかたい事計り也覺。」  
情無い〜とて世に住めば情無いこと計りなりけり。」  
千早振る神代も今も同じ世を皆末の世と思ふ憐れさ。」  
大乘佛敎の何年待ても一般世人に知られざるは、其説き方の餘りに高遠なればなり。救世の敎は卑近を貴ぶ吾人が明治廿五年に於て、圖らずも永き迷と脳病とより救はれたるは此敎なりし。然れども吾人は此敎義と方法との全部を丸呑みにするものにあらず。敎義の如きは詮じ詰むれば各敎皆其揆を一にするのみ。獨り吾人が此敎に於て主として取る所のものは、其天照大神を宇宙の大自觀と一體なりと觀するの信念是なり。

## 十二 天照る神なる思想

吾人は茲に謹て掛まくも畏き我 皇祖の神の御名につきて考ふるの自由を許容せられんことを願ふ。

普通の神道に於ては、宇宙の主神として天御中主神を立つるもの、如し。竊に按ずるに此思想は是後世の所謂神道家の所説にして、我大和民族原初の思想にあらず。自然の靈に養はれ最偉大なる抱負を實現し來りし吾人祖先は、直觀的に我皇祖の神に於て天人合體の實を認めたりしなり、故に之を稱へて天照大神とは申せしなり。

我 皇祖の神の御名は 天大日靈貴尊と申奉る。然れども其徳天地に合し神人合一宇内精神界の歸向點なりと觀ぜしを以て、最も美しく最尊き 天照大神の御名を付け奉りしなり。譬へは大國主命が種々の名稱を多く持たせられしより、一括して又大名持命と稱へ申せしが如し。

天照大神とは、他敎に於て天帝と云ひ天と云ひ彌陀如來と云ふ思想と同じ。さるが中にも言靈の幸ふ國なれや、最大最美の形容詞を付け加へて美稱せし

解釋新

なり。故に天照大神は之を太陽に配し、天の窟戸に隠れさせられて、六合晦冥となりしなど、小説的の神話を傳ふるも、亦是一の形容にして、唯天を知らしめず御徳の廣大無邊神人合一と認めたるのみ。天を知らしめずとは精神界の全部を統一し給ふを謂ふ。是全く我國民の自然性に發したる理想なり。それ神代は邈焉測度すべからず。何れの國何れの社會も、其歴史の源頭に於ては皆寓意的神話より始まらざるなし、我古事記の如きも亦然り、故に之を解釋せんには、文字を離れ言語を離れて考察を加へざるべからず。此の如くにして吾人は我神代の事實に於て左の事を確信す、曰、吾人祖先は最自然なる汎神論の實現者なり。

神道には他教の如き大教祖なく、組織せられたる教理なく、結集せられたる經典なし。なきこそ其筈なれ、是其教や自然に出で、自然に行はれ、自然に發展するの道なればなり。無きが如しと雖も其實他の有るに勝れるものは有り。其性情、其言語思想、其徳行を以て思議すべからざる、雄渾自然の大徳光に

一切自然  
教皆無有  
教祖豈唯  
乎哉

より直に天人合體の實を現はし給へるは、吾人の祖先が古に於て認めたりし如く、吾人は今日尙我國祖に於て之を見る。

### 十三 二宮尊徳翁の報徳教

故蟹江博士は曾て徳川時代に於ける自由研究の精神に就て述べられたり。徳川時代の學者は國學の一派を除き、他は悉く儒教の教權下に立ちしなり。末葉に及んで自由研究の曙光始めて萌し來り、最自由の境に跳り出でたるものを二宮翁の報徳教等となす。翁は大學の一書より悟入して遂に道德經濟を融合したる教を樹立す。此教は富士山周邊の諸國に行はれ、今や益全國に普及せんとす。此教の最後の理想とする所は左の翁の歌に現はる。

古道に積る木の葉をかき分けて、

天照る神の足跡を見ん。

自ら之を解して曰、積る木の葉とは儒佛各教の典籍を云ふ、天照る神の足跡

とは、神祖の此國を開き給ひし大御績と云ふことにて、やがて又一切の神の道即眞理の法則を尋ぬるを意味すと。

此報徳教祖は黒住教祖と全く同時代にして、共に幕末の自由精神の産物なり、予は之を東西の双壁と認む。而して其精神の歸着點は、云ひ合せたらんが如く共に、天照大神に向ふ。是奇にして奇にあらず、濃霧暗雲の鎖すなくんば葵は必ず日に向ふなり。或は學問、或は理屈、或は偏信の其耳目を掩ふことなき、眞個無邪氣なる國民の大和魂に聞け。彼等の歸向點は開闢以來常に茲にあり、今日も然り明日も然り。

黒住教の信仰治療に成効したるが如くに、報徳教は道徳的經濟法に成功せり。此兩者は共に今日の文明に向て多くを寄與すべき能力あるものにして、國民の知らざるべからざる所のものなり。

#### 十四 明治聖代に於ける精神界の沿革

吾人は以上に於て神儒佛耶四教の一斑を考究せり、以下一轉して明治に於ける精神の流れを究明せんとなす。

知識を世界に求め大に皇基を振起すべしとの聖勅と共に、開國進取の世の中となりて、西洋の思想文物滔々として我國に入りしより、舊思想の破壊となり、其反動となり、歐化主義となり、國粹保存主義となり、自由説となり、保守説となり、或は極端より極端に向て妄動し、暗闘盲擊淵となり瀨となり、而して今や幾分靜平に歸したるの觀あると同時にハイカラの全盛となり、此間に於て外教の駸々として我國の精神界に注入せらるゝを憂どなし、舊來の各教を睨牆的狀態より覺醒せしめて、教界の一大トラストを企てたるものを、明治二年前後に於ける大道社となす。

#### 十五 大道社

大道は坦然たり猫も行くべく杓子も行くべし。國體を護持するは神道に若く



なく、轉迷開悟は佛道に勝るなく、經世の教は儒教よりよきはなし。其他諸子百家の説各一得一長あるもの、皆此大道社に於て結攝せらるべしと唱へたるもの、是河合清丸先生の大道社なり。

君は予が同國の人、神道より出身して故鳥尾子爵の感化を受け、才學に加ふるに文章辯舌を以てし、一時舊來の精神界を統率して立つの概を示されたり。然りと雖も既に大道と謂ふ。獨り耶蘇教の通行せられざる筈なきに、之を除外したるは其根本既に不合理なるのみならず。各教の聯立組織にして融和合成せられたるものならざりしが故に、今日に於ては殆ど其勢力の見るべきなきが如し。

然れども其憂國の至誠と、精神界に對する貢獻は、豈尠なるものならんや

## 十六 日本主義國教論

吾人の目して日本精神の大振動と云はんと欲するものは、明治三十年頃木村

鷹太郎先生によりて代表せられ、井上博士及故高山博士等の同意に成りし、日本主義國教論是なり。

曰、日本建國の精神を明にせよ。日本國民の祖先が有せし抱負を現實にせよ。國祖の理想は徳光的世界的大帝國を造るにありしなり。國家は國教を有せざるべからず。國教とは宗教にあらず、國民の主義理想及それを達する方法を教ふるもの、即國民的教理、廣き意味の國家教育なり。其教や生々、現世、活動、武勇、清潔、光明、繁榮豊富等を主義とせざるべからず。一切の迷信を排せざるべからず。日本は明に此高尚なる理想と主義とを以て建國せり、神道是なり、否普通に所謂神道の名のなき所、國民の心の深底に存する眞神道是なりと。

此聲や、所謂眞個無邪氣なる國民の大和魂は、音にこそ立てね皆同一に反應せしなり、唯所謂學問偏信等の遮蔽物ある人の耳に響かざりしのみ。

吾人も當時に於て此主張の意氣を壯とし之に感謝したりしも、唯惜むらくは

餘りに排他的にして、其結果偏狹に陥りしを見たり。吾人は信ず、日本國家の精神は排他的のものにあらずして全く包有的のものなることを。

### 十七 無神無靈魂說

次に起りし精神界の現象を、故中江兆民先生の一年有半に於ける無說無靈魂說となす。

唯物論の堅壘に立籠り、有らゆる宗教を以て迷信となし、悉く之を地獄に吹き飛ばさんとしたる、其勇氣の奥底に横はれるものは、亦は一箇の大信仰なり。

曾て高橋五郎先生が或無神論の書を批評せられし中に曰 有神無神は是名字の喧嘩のみと、是誠に然り、神の有無を論ずるの時は既に遠く經過せり。無靈魂の說に至りては、吾人は大に君に同意を表するの點あり。とにかく此論が一切の宗教に對して一杯の冷水となり、我精神界に多大の參考を供せしは

吾人の謝する所なり。

### 十八 天人論

我國精神界の錯雜紛糾年と共に其度を加へ來りて、人心の彷徨其極に達し、歸趣の方途に渴するの時に當り。玲瓏の頭腦に東西古今の精神界を映照し、靈犀の筆によりて其歸着點を描寫し出されたるもの、是を黒岩周六先生の天人論となす。

朝に道を聞て夕に死すとも可なりとは、予が此書を讀んで眞先に口にしたる言葉なりし。

他人心あり我之を忖度すと。吾人が從來保ちたりし模索的信條に向て、大々的の光明を與へて曰。二十世紀の今に至りて心的一元論によりて精神界の迷霧を一掃したるの觀あり。あらゆる思想は一主義の下に調和せんとす。物心一如なり、汎神論なり、生命一體の向上主義なりと。

曰、向上主義は多くの教祖を有す。曰、倫理と宗教と合一せざる間は眞の倫理眞の宗教にあらずと、其聲巨鐘の曉霧を破て人類の懶眠を喝破するが如くならずや。

但吾人は其靈魂不滅論に就て多少の疑あり。

### 十九 精神靈動

精神界に於ける最近の一光彩は、桑原俊郎先生によりて發見せられたる精神靈動是なり、

君は催眠術の研究によりて、人の精神が催眠状態にある他人の精神に影響し、若しくは覺醒時に於ける説教忠告等が、他の心機を支配して疾病を治し、若しくは所謂天眼通、千里眼の働きを表はし、遠隔地の事情をも知り得らるゝ靈妙の作用あるを見て、之を解するに精神靈動の四字を以てし、豁然大悟、心的一元論の大信仰に躍り出で、從來の神祕、不思議、若しくは迷信として十

九世紀文明に投棄せられし事柄に向て、殆ど大部分の解釋を與へ、精神力は他の物質を支配するものなるを證して、一面には科學萬能の餘弊に對して一大警醒を加へられたり。

今日普通の知識を有し、而して自己精神の慰安に向て、多少の求めを有するものは、精神靈動全部三篇を讀んで、多少の悟道を得ざるものなし。素より機縁の熟否によりて、夫の程伊川が論語を評せし如く、少しく喜ぶものと大に喜ぶものと、讀み去て手の舞足の蹈むを知らざるものとの別はあり。何れにしても此著は現今の精神界に最よきパンを供したるものならずんばあらず。

君が精神研究の結果は、從來の哲學及宗教に向て一大革新の動機を與へんとす。舶來其儘の催眠術者が心理學若しくは動物磁氣說等を以て説明を試むるに當り。君は直に信仰の根抵に溯り、顧みて佛教の哲理を以て宇宙心理學と道破し、惑病同源論に生命を與へて、汝の信仰は汝の機能的、器質的全部の

疾患を癒すと云ひ、健康の精神は健康の身體に宿るにあらず、健康なる精神は健康なる身體を造ると謂ひ、あらゆる奇蹟、まじなひ、呪咀、加持祈禱、捧寄せ、火生三昧等は各精神の靈動に基くといひ、遂に宗教の極致を闡明して、宇宙は元より過現未の別もなく、小我の擴張は大我に合し、極樂地獄は現在心の上にあり、精神の反動は人生禍福の因果律たり、自力他力も善悪も畢竟一切一如に歸するの理をば、直指人心、否本元たる佛教家が御經の文句に拘泥して左視右顧せる間、直ちに大乘佛教の奥の院より抜き出し來りて、吾人凡夫の眼晴に暴露せり。

蓋し精神の靈動に對する事實上の研究は、尙未明の時代にあるべしと雖も、從來の思想が精神其物に與へし評價の餘りに誤解なりしは、君の發見によりて大に確められたるを疑はず。況んや其信仰論の如きは、何れの宗教と雖も其眞意は決して此外にあらざるべし。

吾人が獨り惜む所は、君が此精神界に於ける新しき發見をば、惜し氣もなく古き革袋に盛りたまへるが如き觀あること是なり。されど天人論と精神靈動とは共に東西文明の接觸によりて閃發せられたる、一大電光と謂はざるべからず。

## 二十 佛教國とは何ぞや

吾人は以上に於て明治に於ける精神界の現象を概觀せり、あらゆる思想は皆多くの教訓を吾人に與ふ。今や吾人は其教へられたる所を以て、更に精神界に向て吾人の所思を披瀝せんぞす。

佛教國とは何ぞや。政教一致佛道によりて國を立つること、夫の西藏の如きは、是れ眞の佛教國と謂ふべし。されど普通には、かく政教一致ならずとも、社會の多數が佛教を奉ずる國は、之を佛教國と謂ふ。我國及支那朝鮮等も現今にては其教導の振はざるにしても、尙因習の惰力によりて儀式文けにても、國民の多數は其信徒の籍にあり。此意味に於て佛教國と謂ふは元より不可な

し。唯佛敎國と謂ふよりして、佛敎は其國の國敎かの如く思ひ込むは、他國はとにかく、我日本國に於ては不通の誤想なり。

又一方に於ては、我國の神道なるものが宗教的勢力として至て目立たざるより、我國には一定の國敎なきが如く誤解せるものもあるが如し、此二者は共に大なる誤なり。

譬へば茲に亭々たる喬松ありとせよ。又藤の蔓がそれに纏繞して枝と云ふ枝を掩ひたりとせよ。初夏の空に紫雲一帯此の松の木に漲り、其綠色を隠したりとせよ。之を藤の木と謂へば誰か其誤れるを笑はざらん。よし其綠葉は蔽はれたりとも松の木は枯れたるものならんや。否美しき藤花の紫も此松の生命に支持せられて懸るのみ。藤の生命は松の生命にあらず、否餘り緊縛せしめては却て此松の害なり。佛敎の我國に於けるは此藤の松に於けるが如し。我國民が自ら佛敎國民として其誤解に氣付かざるは、藤蔓が此松を緊纏するを顧みざるが如きのみ。

吾人は我國を佛敎國と謂ふことには甚不賛成なり。先頃の新聞紙上に、我駐清公使より清國に向て佛敎の布敎權を請求せられしに、清國にては佛敎を我國敎と認めずとて其請求を拒絶せし由を記せり。事實如何なりしやを知らざれども、他國人にても佛敎を我國敎と認めざるは、左もあるべきことなり。「或は聖德太子以來佛敎は我國敎となれりと主張するものあらん。左れど其誤れるは猶聖德太子が憲法を定められしより、其以後の我國を以て立憲制度の國なりしと云ふの誤れるが如きのみ。

## 二十一 神國とは何ぞや

昔者猶太人種は自ら稱して神の選民なりと謂へりしと云ふ。永き歴史の今日に至るまで、國民が自ら其國家を稱して神國なりと云ふもの、我國を措て他に何處にありや、是何やら神秘的なるが如くにして實は神秘の事柄にあらず。

今日、神國と云ふ思想は、普通の學者教育者に至るまで、何か迷信的の言葉なるかの如く之を抛棄し、之れが解釋を試むるものなし。只唱歌の歌詞などに保存せらるゝより外に、教師之を生徒に言はず、偶神道家之れを言へば聞くもの多く迷信として之を遇す、

神國。嗚呼之れ常磐なる松の生命にあらずや。然らば神國の眞意義如何。蓋し神國とは精神國と謂ふことのみ。心的一元論は宇宙全一を以て一精神の活動となす。精神は神なり。この精神の活動の具體的に最人の知覺に近く現はれたるを太陽系となす。太陽系の宇宙に於けるは殆ど其一細胞に過ぎざるべきも、其運行の有様に於ては必ず全一と同形式を保つに相違なし。而して太陽系の主精神は太陽なり。大なる精神は大なる精神を感ず。我國家の自然發達は何ぞ太陽系に似たるの甚しきや、殊に神祖を尊んで直に之を太陽に配し、之を國家的精神の歸向點として天神地祇八百萬の神を統率し給ふとなす。天神地祇八百萬の精とは何ぞや。日本國家に於ける、あらゆる心物一切を謂

ふ。吾人は前に云へり、吾人の祖先は自然的汎神論の實現者なりと。故に自ら視て神となし、而して物にも其靈を認む。人死すれば「神去る」と云ひ決して佛になることなし。一家に於ては一家に祭り、國家に於ては國家に祭る。此國家に祭れるものは位と功績との大小によりて、官國幣社及縣社等となし、更に一村一郷に共同の祖先若しくは特別の功勞あるものを祭る。是を村社郷社攝社等となす。此の如く生死の別なく汎てを神とす。故に自然に稱して神國と謂ふ。此精神を統括して有形上に紀念し奉れるものを伊勢の太廟となす。誰か黒住教を以て太陽教と云ふや。太陽は一大火團のみ、然れども彼れや太陽系の精神なり。宇宙全一精神の姿なり。吾人は之れに國祖を配して之れに對すれば國祖を想見し奉るなり。誰か神道を以て多神教と謂ふや。又何物の愚か汎神論を以て無神論とは謂ふぞや。

## 二十二 神道は祭天の古俗なり

神道は祭天の古俗なりとは、曾て大學の某教授が其失職の災を買ひたりし論文の題目なりと云ふ。吾人は其内容の如何なりしやを知らざれども、唯此題目のみに就て考ふればコハ確かに眞實なり。

抑天を祭るは人間道義の最上乘なり。あらゆる宗教。あらゆる倫理の根抵は、全く敬天即天を祭るに出づ。天を祭るは小我が大我に對して其敬度を捧ぐるものなり。是小自觀が大自觀に對して其忠孝の極を盡すなり。是豈一切の倫理道德の極致にあらずや。

神道は此祭天の自然的美俗が自然に流露し來りたるものなり。其末流に於ては所謂淫祠及迷信を伴ひ來れりと雖も、コハ眞神道の精神にあらざるのみ。天を祭るは詰り祖先を祭るに歸す。神道の祖先教と謂はるゝは即之れが爲めなり。然り祖先教は教への最至極せるものなり。見よ大我は小我の祖先にあらずや。天と云ひ神と云ふは是吾人が祖先のみ。孔子曰、祖先を祭るは天に配するより大なるはなしと。蓋し祖先を祭る、天を祭る一のみ、其精神は唯

報本反始にあり。

### 二十三 報本反始

亭々として雲を凌ぐの喬木がよく其地位を保つは何ぞや、其地上に現はれたる勢力に劣らざる勢力を以て、地中に根ざすが爲めにあらずや。桑原先生曰、精神の反動は宇宙間の原則なりと。孔子曰、終りを慎み遠きを追へは民徳厚きに歸すと。然り其本に報じ始めに反るは、是樹木が力を其根抵に致すのみ、其向上は是必然の結果にあらずや。

曾て某博士の説を聞くに曰、東洋は恩の教に育ちたりと、然り儒教にせよ佛教にせよ、其教の源頭は唯天恩に報謝するに始まる。二宮翁の其教に報徳と命ぜしむ故あるなり。報恩は是一切の宗教倫理の根本條件なり、此思想は決して黄色人種の迷夢にあらず。

然りと雖も東洋の各教が餘りに恩を説くに偏して、其極恩者が被恩者を拘束

するに至り、遂に社會をして其弊を受けしめて、沈滯不動の勢を來したるは大に是あり、支那の如きは其最甚しきものと謂ふべし。美に懲りたりとて膾を吹くべからず。報恩教に弊ありたりとも、報恩其物は汎ての教の第一義なり。恩を報ずるは之を實踐の上よりすれば近きを先にし之を信仰の上よりすれば遠きを先にせざるべからず。現在の君父に盡すは是祖先と天とに盡すものなり、生命は一體なるが故なり。夫の汝の父母を棄て汝の兄弟を棄て、直に天なる神に歸すべしと謂ふものは、吾人は其語弊の多きを認む。否現在の君父に盡すは是天なる神に歸する所以、神に歸するは是現在の君父に盡す所以にあらずや、孔子曰、丘の禱ること久しと實に然り。

#### 二十四 如來は無上法皇なるか

次に佛教家の套語たる如來は無上法皇なりとの思想に檢覈を加へんとす。如來とは眞如の如くあり來ると云ふことによし。眞如とは宇宙の實相、即大自觀なり、神なり。然り是實に無上尊なり。此思想や決して謬りあるものにあらず。

然りと雖も今日我大和民族にして、得々として如來は無上法皇なりと謂ふは是れよき事なりや。試に思へ我精神國は之を統括するに、天照大神を以てし、之を太陽系の精神に配し、之を宇宙全一の精神に配して、天成の無上尊として顯はれ給ふにあらずや。是れ空想上に作成せる如來にあらずして、實に生きたる彌陀其物にあらずや。本地垂迹説の現はれし時、天照大神を以て毘盧舍那佛とせりと云ふ。彼等も全く同一の見地にありしなり。然らば尙何ぞ別名を弄するを要せんや。釋迦を今日に起し來れ、彼は必ず吾人に左袒せんのみ。名は實の賓なり、是れ慎まざるべからず。佛教者はかゝる思想を得々として口にし筆にして憚る所なし、彼等は、天照る神以外に如來ありと信ずるか。之れ我國の精神界を二元の渦中に擠して顧みざるもののみ。甚しきに至りて



は諸天善神は佛法を守護するものなりとして、延て我祖宗の神靈を以て其空想の付屬物となさんとす。嗚呼敬愛なる兄弟諸君よ。諸君はよく之を忍び得るか。

諸君よ請ふ因習の夢より覺めて、靜に考一考せよ。理屈に於ては眞實なる思想なれども、此思想こそ是れ我歴史に蘇我馬子、僧道鏡等の出現したる原由なれ。

吾人も亦何物よりも眞理を尙ぶものなり。而して實現せられたる眞理は更に更に之を尊信す。譬へば知識の貴きは知識其物よりも知識の効果の更に貴きによれるが如し。是れ純粹なる我國民の本尊は、彌陀如來にあらずして、天照大神なる所以なり。

### 二十五 一大催眠術

天の力、神の手によりて施術せられたる一大催眠術は、吾人之を我國家に於

て見る。

宇宙全一の精神は、我祖先の精神に感應して、天照大神に於て直接宇宙の神を見たり。此神の口よりして一大暗示否明示は發せらる。即三種の神器を皇孫に授け給ひて、豊葦原の瑞穂の國は我子孫の君たるべき地なり、汝行て治めよ、寶祚の隆ならんこと天壤と極りなかるべしと宣へり。嗚呼萬世一系國運の益隆なる是其所のみ。

況んや其神器の如き、古の學者既に之を解して自然に發したる智仁勇の御教なりと謂ふ。吾人故に曰、其性情、其言語思想、其德行を以て思議すべからざる雄渾偉大なる大徳光によりて、無爲にして教を垂れ給へる眞の大教祖は我眞神道にあるなりと。

吾人祖先は此精神の大感應に信賴して國體の美を今日に傳へたり。今日の吾人たるもの豈亦何の疑ふべきことかあらん、唯全速力に此信念を以て進まなかな。嗚呼此自然的な一大催眠術、眼ありて見ゆるものは視るべし。

其國號を日の本と謂ひ、國性を表して神國と謂ひ、金甌無缺萬世一系の國體を發展して、茜さす日の丸を國旗の徽章となし、更に萬花に後れて嚴霜に傲るの菊花は、皇室の御紋章を飾る。凡此等の一切は國民性の自然に發したる特色にして、二十世紀の意匠界に千萬金を懸賞するも、到底望みて得べきものにあらず。所謂天授、人力に非ざるものゝみ。

## 二十六 神道と佛道との比較

吾人は上來甚佛教を貶したるが如し。然れどもこは唯其信仰の歸着點を神道に取り上げたるまでにして、其佛教の哲理に至りては、其煩瑣なる構成的想像の不用部分を篩ひ去りて、大に之を用ひんとするものなり。必偶像の如來に合掌せざれば佛教は信ぜられずと謂ふにあらず。否今日は、かくしてこそ眞正の佛教を信じ得らるゝなれ。彼は確かに全壹神道の一部たるものなり松の全部に纏ひてこそ藤の花も興醒むれ。一二の下枝に懸垂しては、一の美

觀たるを失はず。

之を用ひんとすれば大に其性質を知らざるべからず。今之を神道に比較して其傾向の異なるを見ん。

神道にては日を貴び、東を尙ぶ。佛道は月を貴び西を尙ぶ。即神道にては朝日の豊榮登りと云ひ、天津日嗣と云ひ、高照る日の御子など云へるに、佛道にては眞如の月と云ひ、西方淨土と云ふ。神道にては有を取る。佛は無を取る。神道は活動を喜び佛は寂滅を喜ぶ。甲は生々を云ひ乙は死々を云ふ。甲は拍子、乙は合掌。甲は樂觀に入り易く、乙は悲觀に陥り易し。甲は身體を淨觀し、乙は不淨觀す。甲は男女を不同視せず、乙は女人を罪障ありとす。之に類する事項は尙多々あり。畢竟神道は陽教にして、佛は陰若しくは中和の教相なり。悟道の上に於ては一旦此中和の心地に返るを要す、而も實地には陽動せざるべからず。宇宙の太極は中和より剖判せしやも知らされども、現實は活動なり。故に此性質の上よりしても佛教は神道に及はず、其神道に勝れる

は、全く其哲理の深奥にして眞個悟道の善知識たるにあり。吾人は此知識を了して、陽教の主精神を信仰すべしとなす。換言すれば一の養心的學問即藝術的哲學として佛教を取るなり。

## 二十七 各教の通弊

現今各種の宗教と謂ふもの、通有せる弊習は何ぞ。曰、思想上に於ける鎖國主義を固執して、少しも門戸開放をなさざるにあり。佛教家は一にも二にも御經の文句に拘泥して、一點一畫も祖師の唾沫を棄てざらんとし。耶蘇教家はバイブル以外に眞理の探究なるものなしとなす。かるが故に全力を盡して其固有の經典を研鑽すれども、殆んど他教の思想を攻究するものなく。攻究するものはありとも、他教に於て闡明せられたる眞理を眞理として取るものなく。稀に之を取るものもあるも、之によりて自己の教理の不完全なる部分を發見すること能はず。偶發見するも、之を棄て、改良するの勇氣に至りては

斷じてあることなし。獨ユニテリアン派に於ては、幾分此固陋主義を脱せるが如しと雖も、是も未だ十分なる發達を遂げたるものにあらず。

孔子大舜を評して曰、大舜は大なるものあり善を人と與にす、己を空しくして人言を納る。苟も人言を納るれば、衆人の智は皆我智なりと。嗚呼是天地自然が一切を包有して向上するの道にあらずや。而して吾人此の此則天主義の尤偉大に發表せられたるものを、維新の際の 聖勅に於て見る。即ち知識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

と是なり、是眞神道の精神なり。世間何の教か此寛宏無碍なるに若くものあらんや。況んや近時の進化論は、生物向上の徑路を發見して、炳として火を見るが如し。實に進化は宇宙の法則なり。何の教か此進化の法則に洩れて、一定不動の態度を以て刻々變轉の人世を規制することを得るものぞ。吾人は、教理の上に於て。此鎖國的弊習なきものは、唯我眞神道に於て之を見る。

## 二十八 靈魂論 (一)

宗教とし云へは必靈魂を説かざるなし、靈魂論は實に各教教理の主要部分を占むるものなり。而してあらゆる宗教は皆靈魂を以て不滅となす。特に最近の新福音として吾人が多くの尊敬を拂へる、天人論及精神靈動の如きも亦同しく不滅説なり。

靈魂の不滅と云ふことには明かに二様の意味あり。此二様の意味は、全く靈魂と云ふ語に與ふる意味の二様なるに原因す。即一は靈魂を以て個人の自覺を其儘に存したるものとする、一は全く個人の自覺なきものとする、是なり。全く個人の自覺なき死後の靈魂(人格)が不滅なるは、是をエネルギー不滅の理より見るも、又人の靈魂は宇宙の大心靈の分派なりとの説より見るも共に眞理にして、之に對しては何人も異論あるべからず。今日靈魂滅不滅の大問題たるは、全く人間の死後に於て、生ける時と同じく自覺を保ちつゝ、

靈の存在し能ふや否やに存す。

又靈魂の不滅に就ては、其在り場の上に二様の考あるが如し、即一は次代の人心の裡に存するものとし、一は幽界とか冥府とか陰府とか天國とか謂ふ、生きたる人間の感官にて覺知し得られざる、宇宙間の或所に存するものとする、是なり、此中、次代の人心の裡に存すとするものは、全く自覺なき靈魂に關す。

窃に思ふに、一切空と觀じ寂滅爲樂と説く佛教に於て、死後自覺ある靈魂ありと説くものは、全く例の方便にして、釋迦の眞意は必無靈魂説ならん、輪廻復生説の如きも蓋し一箇の方便的想像論のみ。

## 二十九 靈魂論 (二)

個人の自覺を保てる靈魂は、其人の死後に存在し能ふか。吾人は之れに否と答ふるに躊躇せざるものなり、請ふ其理由を述べん。

一、吾人が生れて三四歳にまで生長せし間の事を考へよ。實に空々漠々にして誰も知り居るものなかるべし。是れ吾人の故郷なり。尤三歳にて字を書きたるものもありとの事なれば、さる神童は三歳の時のことも知り居るやも知らざれども、それとても生後直に完全なる自覺の生じ得べきにあらず。

二、睡眠中のことを考へよ。よき睡眠ほど全く自覺を失ひて、一切空所に至るに非ずや、死後の状態は是のみ。人往々睡中は多く夢を見るを以て、死後にもかく夢あるべしとなす、是謬なり。睡眠中の靈魂は全く宇宙の大靈に返りたるものなれども、一方に尙身體の生命が、生理的運營を止めざる間は、其餘波を受けて心的作用の一部を動かさるゝのみ。夢は身體の不安なる時に多し、故に精神修養の至れる人、或は著しく健康なる人には全く夢なしと云ふ。煩惱多き凡夫にても、死後には決して夢あるべからず。是既に肉體の生理的運營なければなり。假りに一步を譲りて死後に夢ありとしても、元來夢は完全に自覺を存するものなりや。吾人は夢の中に覺醒中には決してあるま

じき失策を仕出來し、ア、夢であつてよかつたと喜ぶこと屢あり。夢中の吾は眞吾にあらず、況んや死後の夢中をや。

三、吾人は曾て眩暈の爲めに、約十分間を人事不省に過ごせしことあり、死はこの人事不省の無限なるものゝみ。

四、人老衰に及びては二度小兒に返ると云ふ。齒脱け、耳遠く、眼薄くなると同じく、其心靈の働きも大に衰へ來るものあり、之を耄碌すると云ふ。かゝる人は何時の自覺を死後に保つを得るか。全く退化せる臨終時の自覺を保つとせば、不滅も誠に迷惑ならずや。

五、精神病者を見よ。彼は此世ながらに既に自覺の幾部を失却せるにあらずや。

以上の如き理由を以て吾人は靈魂消滅説を賛す。死後の問題は之を實驗に徵するを得ず、然り實驗し得られざれども、以上の事實は之を證明するに餘りあり。之を解せざるものは、中江氏の所謂宗教に懸徴せられたるものか、若

しくは餘り研究に深入りして方角を取違へたるものゝみ。

### 三十 靈魂論 (三)

精神靈動第二編精神論中には、靈魂が死後に現はれたる各種の事實を列舉せらる、并に現今精神研究の各種の會に於て研究せらるゝ事實の上にも、幽靈死靈の存在を證明せるが如きもの多し、吾人の聞ける事實の上にも亦左の如きものなり。

予が郷伯耆國根雨は、治承の義臣、長谷部信連謫居の遺跡にして、其紀念の今日に残れるもの多き中に、社寺其他地名等を京都に摸したるものにて、其寺を延曆寺といふ。此寺の前任は人柄のよき老僧なりしが、此時代に久しく寺男を務めたる者(現存)の話に、靈魂の存在は事實にて人死すれば魂は寺に行くものなり。其譯は右の老僧が夜中往々本堂に一種の靈響ありたりとて、死人ありしことを豫言せる時には、必時を移さずして死亡の報知來るを常と

せりと、此男は其性質上虚偽を語るものに非ず。

又吾人の親戚中にも半夜の鷄鳴に驚かされ、非常に氣にかけ眠りもやらぬ所へ、其父の不幸の知らせに逢ひたるものもあり。所謂虫の知らせなど謂ふことは、コハ一般普通に言ふことにて、精神靈動は之れを説明して、全く精神の感應なりとなせり。

吾人は以上の如き多くの事實に對して、或は今日の科學が未だ照破せざる一種の眞あるべしと思へるに拘らず、尙靈魂は滅失するものと信ず。其仔細は人の生命の斷末間に於ては、譬へば蒸氣が水に還元するに當りて其潜熱を放散するが如く、其結果せる靈性の渦動環を放て、無線電信的に平素最執着歸向せる人若しくは物に向て、電走して其中和を求むるものと信ず。此靈動を受けたるものは、或は夢に其人を見、或は外圍の或物によりて怪感を與へられ、若しくは覺醒中にも幻覺等を生ずるに至るなり。故にかゝる現象は人の死後多くの間なき場合のことゝなす。或は數年若しくは數代前の死靈が現時

の人に感ずると謂ふは、吾人は事實全く反對にして現時の人の誠心が此等の死靈を感ずること、猶かの被催眠者が遠き既往の事柄を喚想し得ると同じことにて、死靈其物に自覺も意識もあるにあらずと信ず。水なくして波をあらし、火を滅して光をあらし、樂器を碎て音曲をあらすとは、是出來得べきにあらず。

引きよせて結べば草の庵なり、

解くれば元の野原なりけり。

吾人は此歌を肉體にも靈魂にも適用するなり。

### 三十一 靈界とは何ぞや

吾人の今日所有せる感官及心識を以て感得せる現世以外に、別に所謂天國とか、冥府陰府とか幽界とか云へる心靈界が、此宇宙の一部に存在せるか。吾人は之に對しても亦否と斷言するに躊躇せざるものなり、靈界とは現在の心

靈界是のみ。

桑原先生曰宇宙は元來過現未の別なしと。吾人も謂はん宇宙の實體は唯一の現在界是のみと。宇宙は全く無始無終の現在なり、生滅流轉する差別界の個體よりして之を見れば、茲に時間の相を観するも、實在よりして之を見れば單に絶對の一時のみ。譬へば地球の上にくそ晝夜の別をなせ。太陽には永遠の一日なるが如し。

人よく過去は過去をして之を葬らしめよと謂ふ、されども過去は全く葬られて現在の裡にあるなり。又未來と云ふは唯是現在の推移のみ。此現在界は全く宇宙大心靈の活潑々地たる靈動其物なり。此以外に豈又別の靈界なるものあらんや。

人の此靈界にあるや、一思想一言一行一動一靜、凡て物質不滅、勢力不滅の鐵律により、因果の連鎖に繋縛せられ、時々刻々に此靈界に印象しつゝ、其向上に參するものなり。一旦其生命の亡滅するや、其自覺ある靈魂は消え肉

體は土に委するも、靈界に印象したる其精神は永久に滅ることなし。是之を眞の靈魂不滅と云ふ、限りなき生命とか生通しとか謂ふも是のみ。此以外に不滅を願ふも是迷想なり慾情なり決して得べからず。

絶海の孤島に獨棲せる蠻人の生滅も、此意味に於て全く不滅なり。左れども次代の人心に交通なき不滅は、向上に資するの點少きを以て、茲に向上せる人類は其社會を作て其不滅を大にす。社會内の個人は其精神の大小強弱等によりて、各其社會内の之に相當する部分の人心の内に生く。かくして更に一段の進歩をなして、歴史を具へて之を記し、若しくは紀念の碑石を立て、或は繪畫に彫像に寫眞に蓄音機に之を保存するに至る。然かも其紀念の最美的に最敬虔的なるを我國に於ける神社の制となす。

不滅なる靈魂はかくの如くにして社會内の人心の裡に生く。社會内の人心は此前代の靈魂を記憶するものなりと雖も、實は全く前代の靈魂に作られたるなり。此次代の靈魂を作る社會の靈魂が、一般に共通して持てる最有力なる

思想を社會精神と謂ふ。我國家に於ける此社會精神を統括し給ふものを 天照大神となす。

古人謂ふ朝に道を聞て夕に死するも可なりと。此思想は道を聞きたる嬉しさに満足して、最早此上望みなし何物よりも厭はしき死も且辭せずと謂ふことなるべし。此思想にては死後に靈魂の不滅を豫想せず。自覺ある靈魂の存在などの條件付かずに死するでなくては此語は力を失ふなり。吾人は此靈界に出でて殊に我國家に生れ、此社會精神を呼吸することを得たる嬉しさには、誠に一切無條件にて夕に死すとも可なりと思ふなり。

神風に心安くも任せつる

櫻の宮の花のさかりを。

此世にし楽しくあらば來ん世には

虫も鳥にも我はなりなん。

或は謂はん未來に於ける自覺的靈魂及天國地獄も。全く精神の自由思惟に基



き、有りと観ずるものにあり、無しと観ずるものに無きにあらずやと。然り是亦一理なり。蓋、自覺的靈魂及未來に於ける天國地獄の存在所は、實に一ヶ所だけあり、即人の想像的心識の裡是なり。而かも是亦現在生存せる心靈界の一部なるのみ。

必、想像上に於ける幻影を事とせんか、則吾人も亦大に説あるなり。

### 三十二 想像せられたる靈界 (一)

個人を本位として考ふる時には、吾人の死後は吾人の生前と同じく無々虚々の一切空なるべし、佛教などに普通に所謂靈界は此境地なるが如し。されど宇宙を本位として考ふる時には、かゝる無何有の郷は現實にあるべからず。宇宙は實に一大心靈の大活動にして、常に森羅萬象の色を帯びて向上しつゝあり。吾人は此無始無終無限絶對の大心靈以外に別に靈界なるものなしとなす、是絶對の外に何もあるべき筈なければなり。

佛者の所謂色即是空、空即是色、迷ふが故に三界の城あり、悟るが故に十方空なりと謂へるものは、是宇宙の活動は一面より見れば不斷の色象、他面より観すれば刻々の空なり、此空と色との一如に歸する見地に悟道の根基を置くべしと云へるまでにて、如何に悟りたればとて人は日々三度の食事を取らざるべからず、現實は活動の外にあらず。

人の活動せる靈界に立つや、宇宙進化の法界に居り、自然淘汰生存競争の青天井に暴露して、無限の慾を有限の鐵柵に制せられ、或は一時の順境に立つことあるも、禍福流轉の定めなき淵瀨に浮沈するもの多き常なるが故に、之に應ずるの態度は到底恬淡寂靜を許さず、宇宙心靈の派生なる個人の心靈も、多く固有の圓滿を缺きて七情の波動を絶たず、茲に憂愁、罪惡、煩惱、不淨の念を觀じ、天道の是非を疑ひ、其極身に病となり生命に死となる、浮世は全く憂き世と觀ぜらるゝを以て、遂に百方之が慰安の道を求めて始めて之を宗教に得たり。

蟹は其甲に似せて穴を堀り、あらゆる危害より避難するため自己の安心立命の場所を作る。各種の宗教は全く此蟹公の穴の如し。蟹は其穴を土石の間に堀れども、宗教に依頼する人間は之を自己の想像的心識の裡に作る。假りの此世には如何にもあれ、唯信仰の舟に乗りなは、やがて来る彼岸に於ては、不滅の靈魂を以て或は神の子と共に神の榮光に浴し、或は西方淨土に佛と蓮座を共にし得べしと信じて、大に現世の苦艱より脱離することを得るなり。されど此信念は、全く其當人の生命のある間、其想像の心識の上のみの實在にして、其人の死後には全く空で豫定通りにあらぬことは請合なり。唯其人の死後、次代の兒子など同方式の信念にあれば、又其人の想像識の裡には全くの不滅として現在すべきのみ。

### 三十三 想像せられたる靈界 (二)

人の心の思惟は自由なり。其想像上に堀りたる此穴にして、凡ての苦艱より

避難せらるゝ安心立命の場所となり得れば、是誠に簡易なるよき方法なり。靈魂も天國も必未來にありと信じて之を疑はざるは何も妨なきことなり。然り妨なきことなれども其全く空想なるを知らざるは、是其信者の知識の低度なるか、或は信仰に熱して自欺くものにして、之に對して吾人は矢張普通の言葉通りに迷信といふに憚らざるものなり。

されど吾人は茲に暫く吾人の立ち場を離れて、此未來ありとする信者の仲間となり、試みに此想像上の靈界を探險せんか、更に非常なる新事實の發見あるを知らん、請ふ其仔細を語らんか。

抑吾人祖先の此靈界に於けるは果して如何なる状態なるべきか。佛土に生ぜるか天國に在るか、世界各國各人種ともに平和の握手に神の前に平等一體たるか。是誠に至極結構のことなれども、決してかゝる理想的の靈界は現じ居らざるべし。何となれば此靈界に来る人々は其信仰により各其行く先きを異にせり。天國に行くものは異邦人を地獄に排擠しつゝ進み、佛土に向ふもの

は他のものを異教外道として遇するが故に、吾人祖先の如き純粹なる汎神的人種は、他の以前より儼乎たる神城を建立して靈界の一方に立たん。かゝる有様なる靈界に向て日夜に出發する各靈魂は、或は天國に上りてイエスの右に座するを競争するもあるべく、或は成るべく釋迦の慈顔に接近して蓮座の分與を乞ふもあるべく、其他各教によりて種々様々なるべしと雖も、吾人日本國民たるものは抑何れに向ふべきや。嗚呼吾人は遲疑なく進んで吾人祖先の建てたる王城の一衛士たらんのみ。忠愛なる吾人の祖先は現世に於てこそ或は佛教にも歸依せしならめ。一旦靈界の關門を通過して、閻魔にあらぬ白髮衣冠の老翁が自、物部中臣なりと名乗り出で、儼然として誰何し其行く先を究明して、靈界の事情を説示したらんには、入道姿も其儘に必や此神城に馳せ参じたらんのみ。何となれば彼等の大部分はよくくゝのものを除くの外に、大和魂を棄てざればなり。汝の君を棄て汝の父母を棄てゝは、如何に極樂なればとて此靈界に於てまで欣求するものは少かるべし。

右の如く吾人の探險せる想像的靈界は、見來れば全く現在界の反射に外ならず。

### 三十四 永生

以上吾人は死後の靈魂が其自覺を保ちつゝ存在すべきものにあらざること述べたり。即此意味に於て靈魂消滅説を賛したり。吾人は事實の上、理論の上、必其謬りなきを信ずるものなり。

かゝる靈魂消滅説は所謂「永生」なるものを否定すべきか。曰否。抑永生とは事實及理論を離れたる信仰上の觀念なり、知的問題にあらずして情的問題なり。理論の上に靈魂消滅を認むるも、尙永生を觀するに於て何の支障する所かあらんや。況んや靈界に印象したる個人の精神は、宇宙と共に永久に滅ることなし。吾人の精神は吾人の生命が前代の生命によりて造られたるが如く、全く前代の精神に造られたるなり。吾人の精神中には活潑潑地として前代の

精神の生動するを見るなり。此意味に於ける靈魂の不滅によりては、永生は必然に知力の上にも情の上にも眞ならざるべからず、或は其名を竹帛に垂るといひ、或は知己を千歳に待つといふもの。皆かゝる主旨に於ける永生を認めたるもののみ。

吾人は理屈に偏して永生を以て無意味となすものを排す、完全なる人格は其意志知力の欲ぐる所なきと同時に、情に於ても圓滿なる發展を遂げざるべからず。所謂死に事ふる生に事ふるが如くなるは、其形式は時と處によりて異なるべきも、其精神は古今に通じて異なるべきものにあらざるなり。

祭之日入室、倏然必有見在乎其位、周旋出戸、肅然必有聞乎其容聲、出戸而聽、愾然必有聞乎其歎息之聲。

嗟予雖萬死、豈忍與汝離、屈伸付天地、生死又何疑、  
生當君雪冤、復見張網維、死爲忠義鬼、極天護皇基、

(藤田東湖正氣歌末節)

今は早霞が關を立ち出て、

君ある里の花を見んとは。

かねてより君と母とに知らせんと、

人より急ぐ死出の山路

(義士辭世)

是豈至誠の流露にあらずや、情の最美的なる發動にあらずや。

儒家に於て鬼神といひ、靈魂髣髴などいへるは、詮ずる所全く此永生觀を客觀化せるものにして、必しも自覺ある靈魂不滅を豫想せるにあらず。

我神道の所謂神靈てふものも、亦實に此意義に於ける永生の信念に外ならずとす。此信念や特に我國家の生命なるのみならず、實に事實の上の事實にして自覺ある靈魂の消滅を認むるに對して、毫も矛盾する所なきものなり。

### 三十五 宗教とは何ぞや

吾人は上來叙述せる間に於て、全く普通の意味によりて宗教なる文字を其儘

に用ゐたりき、されど本來此宗教とは何物ぞや。

吾人は今日、宗教其物に關せる多くの定義は之を聞けり。されど此の宗教なる語が、如何なる意味を有するものなるかを知らず。もし之を此漢字が表はす字面通りに見て、宗は本なりと解釋すれば、人間根本の教といふことになりて、あらゆるものを包含する教なりとも謂はるべし。なれども今日の實際に於ては、此語は確かにかゝる廣義の解釋を許さざるが如し。

泰西に於ても學者の口よりして、或は宗教は螢の如しとか、或は凡ての宗教は皆迷信を伴ふとか、或は學問あるものは其知識によりて自然に信仰を保てども知識低きものは宗教によりて信仰を保つとか、或は宗教教育は分離すべしとか、唱へらるゝ所を以て見れば、此宗教なるものは決して教の全部なりと解せられざるを知るべし。特に我國の如きは全く教育宗教を分別して、宗教を以て單に社會に於ける一種の機械と見做せるが如し。

かゝる教の全部にあらざる宗教は、社會の永遠に必要なものなるか。換言

すれば、かゝる宗教をば廢滅若しくは合併融和せしめて、宇宙全一に合する

一の教となすことは到底出來得べからざるか。

普通の知識あるものにして、古人の所謂道は一のみ教豈二あらんやの金言を首肯せざるものはあらざるべし。否、愚夫愚婦といへども道理に二つなきことを知らざるものなし。然り道理の一なるは天地の一なるが如し。此一なる天地の間に立ち、一なる道理を教ふる教にして、何故なれば倫理といひ宗教といひて之を分つや。甚しきは我國今日の精神界の如く、殆ど十人十種の見解に分るゝには至りしぞ。

蓋從來、教の統一せられざりしは、時處の相違と人間の性情及知識の状態を異にせしより來りしものにて、之を支那に見るも名教なる儒教が殆ど教權を掌握せる間に、宗教なる佛道が滔々として社會に入りたるが如く。下愚の信念は上智に等しき能はず、所謂大聲里耳に入らずして、而して安心立命は上下の同じく必要な所なるが故に、茲に各種の方便を生じ遂に純粹なる倫理

若しくは學問と、宗教との分立を見、更に時代の推移と共に各教共に各數派に分るゝに至りしなり。

故に今や倫理宗教を合一せしめんには、根本的に人間に於ける知識相違の度を少くせざるべからず、此相違の度が可及的少くせらるゝ時に、始めて社會に於ける倫理宗教の歸一を見るを得ん、而かも是一見しては全く一の理想にして到底之を現實にせらるゝの望なきが如し。嗚呼是果して之を現實に見得べからざるか、是果して百年河清を待つゝの類なるべきか、否々吾人は人類向上の前途には必此境地に到達し得べきものなりと信ず、而して今や既に幾分其曙色を萌し來れるを知るなり。

黒岩先生は天人論に於て既に泰西の思潮界を紹介して、二十世紀の文明はあらゆる思想を二主義の下に調和せんとす、倫理宗教の合一せざる間は、共に眞の倫理、眞の宗教にあらずと謂はる、是大に吾人の意を得たるものなり。夫地球の表面は交通機關の進歩に伴ひて日に月に短縮せられ、文運の進歩及

移住殖民の發達と共に、熱帶地も寒帶地も漸く思想を共通せんとし、教育設備の進歩に従ひて山村僻邑も咿唔の聲を絶たざらんとす、所謂時と場所、性情と知識の相違點は、非常なる速度を以て減却せられつゝあり、此時に當りてあらゆる思想を包含して之を調和すべき一大主義ありて、各種の教を陶冶して打て一丸となし、最も進歩せる社會教育の方法を採り、學校教育と内外相應じて之に臨まば、分立せる各教は旭日の前の雪達磨の如く、遂に消えて跡なきに至らんのみ。

更に之を今日の各教其物に見るに、學問は多く理に偏して信仰を教へず、宗教は多く信仰に偏して理を究めず、其内の各宗各派亦各其一長一短を併せ守りて、固有の鎖國主義により、互に排擊鬪闘の結果、今や何れも多少の疲勞を感じて、各よき調停者を天の一方に望めるものゝ如し。

今や掘出し儘の礦石は滿地に累々たり、石炭も然り助熔劑も然り。彼等は何れも或工業家の己を收めて之を熔礦爐に投入せんことを待てり。嗚呼彼等を

熔鑄精成する一大熔礦爐何處にかある。

### 三十六 一大熔礦爐

謂ふ迄もなく此一大熔礦爐は、開關の前より既に据付けられて今や吾人の目前にあり、我日本の國家是なり。此熔礦爐に通ずる絶大なる風力は何ぞ、曰我國家の精神たる神道是なり。

此神風や曾て一たび現はれて元寇十萬の敵軍を攘ひたりき。更に最近の二大戦に於て正義に敵せる横暴を斥けたりき。其平時に於けるは常に和風の習々たるが如く、殆ど人の知覺に忘却せられんとして、而して其實は、あらゆるものを薰化しつゝあるなり。佛教者に於て最強く此風化を蒙りたるものを日蓮上人となし、儒家に於ては山崎闇齋となす。夫の加茂、本居、平田等の國學者の一派は、此風氣の煽揚に勉めたるものにして、黒住教と報徳教とは共に體を具へて未だ完からざるものなり。

日蓮宗は佛教各派の中にて最も愛國的宗旨なりと謂はる。かの日蓮上人が深く佛典の山路に分け登り、其頂上に於て登る旭日の靈光に感化せられ、固有の熱誠によりて所謂四箇の格言（念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊）を絶叫して、現在の國土、是正報の妙土にして、極樂天國は我國家のみ、此現在の國土を穢土とし更に淨土を他に求むるは、釋迦の眞意に戻るのみならず、實に國家の敵なりとなす。彼が彌陀如來を唱へずして妙法蓮華經を唱ふるものは、豈冥々の間我國家に於ける生きたる本尊に遠慮せしに非ざるを知らんや。

徳川時代漢學の全盛なる時に當り、儒家の眞意義を了會し其門人に教へて、若し孔子孟子を將として我國に來寇せば、一戦之を擒にして以て祖國に盡すべし是孔孟の道なりといひ、晩年遂に神道に歸したるものは山崎闇齋なり。闇齋の國家至上説の如きは今日にては洵に分りきつたる次第なれども、當時孔孟崇拜の時代にありては此問題の解答に苦しむもの多かりしが如く、殊に

闇齋の神道に歸したりしより大に其學聲を落したりと云ふ。之を今日に見れば則闇齋の精神的に傑出せし所以全く茲にあり。此の如く我國家の精神たる神道は、あらゆる思想を陶冶して融合するの力を有す。彼は譬へは一大圓鏡の明晃々たるが如し、凡ての物を寫して違ふことなし。又一大透鏡の如し、凡ての光線を合一して之を自然の白色に歸せしむ、只風氣の未だ熟せざりしや、儒佛其他の各教ともに全く渾一の熔解を遂げざりしも、今や世界の各色素は遺憾なく發揮せられ、一大スペクトラムとなりて此鏡面に映ぜり、其統合は是自然の勢なるのみ。嗚呼此熔鑛爐中に化成すべき一大產物は何ぞ。

### 三十七 全壹神道

吾人は此精神界に於ける最後の一大產物を稱して之を全壹神道と謂ふ。全壹神道とは如何なるものぞや。曰、二十世紀の文明に現はれたる東西古今

の思想を融合化成して、宇宙全壹の向上主義に合する眞神道是なり。

現今世界に於ける、あらゆる思想の中にて、希臘文明より發達せる所謂哲學科學を除けば、其外に立つものは耶蘇教、佛教、儒教の三大教を主となす。此三大礦石に他の諸子百家の小礦を加へ、之に投ずるに哲學、科學の石炭を以てし、之を我國家の精神に吹き立てたるものは是即眞の全一神道ならん。

夫れ儒教は情的に發達し、佛教は知的に發達し、耶蘇教は意力的に發達すとす。吾人が既に述べたる所なり。此三者は各其長所あると同時に又多くの缺點を有す、ソハ今日の哲學及科學の光線に照すときは尤分明に認識せらるるなり。其長所を存して其缺點を去らんとせば到底之を分立せしむべからず、相互に關聯して宇宙一精神の三作用たるが如くならしむべし、而して其一精神とは我國に於ける眞神道を謂ふ。

知情意の三者は、よく平均調和を保たざるべからず、其一に偏するば決して圓滿なること能はず。其邪見を去りて正見を立て、眞の悟道を得るは、吾人



之を佛教の智に學ばざるべからず。平正の感情を養ひ、忠恕一貫の態度を保つは吾人之を儒教の情に取らざるべからず。峻嚴の言行、直往の勇氣、惡魔をして取り付く嶋なからしむるものは、吾人尤耶蘇の意力に倣はざるべからず。

天帝と云ひ、佛陀と云ひ、天と云ふものは、彼等各教の空想に名づけたるが如きものにあらずして、宇宙精神の我歴史上に現はしたる神人合體の實、即天照大神に於て眞誠なる信仰の歸着點あるが故に、三教の長所を統合して之に哲學科學の眞理を加へ、之に活きたる生命を與ふるものは實に我神道に外ならずとす。

此の如くにして、始めてあらゆる思想を一主義に歸せしむべく、倫理宗教を分つの必要もなく、人世は始めて多くの迷信より脱却して眞理の光に浴するを得ん。しかも是れ、地球上に於て唯我日本帝國のみ此大事業を成し遂げ得るの天稟あるものなり。

### 三十八 國民の自覺

難波津に咲くやこの花冬籠り

今を春邊と咲くやこの花。

自然の靈に養はれ純粹無雜なる日本の精神が、始めて支那の文明なる學問の春風に吹かれ、其固有の芳香を放ちたる時に當り、詩人の口を衝て發したる自覺の聲を此歌となす。

武士の大和心を人間は、

朝日に匂ふ山櫻花。

徳川時代文運の最隆盛なる時に當り、百花爛熳の間に日本精神の美を歌ひたる自覺の妙音を此歌となす。

今や泰西の文運は殆ど地球の全表面に揮撒せられ、東洋文明と相互相映發して球上に於ける思想の混一を來さんとす、而して其最濃密に接觸せる處を我

日本の精神界となす。開國の後、日既に淺しとなさず、駘蕩たる春風は再び山野に普からんとす、國民自覺の聲其發せらるゝ何ぞ遅きや。

曰、是決して遅きにあらず既に發せられたるなり。其最も明かなるを日清戦役及北清事變に於ける自覺となし、更に今回の戦役に於て更に大に自覺せられたり。而して是等自覺の眞面目は、吾人實に日本海大海戦の勅語に對する東郷大將の奉答文に於て見る。

黒住宗忠翁曰、難有り有り難しと、實に信仰の眞味は危難の際會を經過して始めて知り得べし。夫れ國家の重寄を双肩に擔ひ、死生浮沈の間際に處して人力の極を盡して運を皇天の神靈に托し、萬死の間より萬全を贏ち得たるものにして、始めて信仰に於ける大自覺を發揮すべし。是東郷大將の凱旋早々大廟參拜の擧ありし所以なり。

吾人はかゝる赫々たる自覺の光輝を仰ぎ、更に我國民全般の等しく此自覺に復らんことを祈るものなり。赤や青や黄や紫や各種の色彩は美ならざるにあらず、されど日光の最美なるを自覺せざるべからず。飲料の種々ある中にも良水の最美なるを知らざるべからず。此の如くにして吾人は或る一の物よりは宇宙全一に合する最包含的のものを取らざるべからず。かゝる包含的のもの實に隣の赤飯にあらずして、自家の白飯なることを自覺せんことを祈る。曾て萬朝報の川柳を見るに曰、

天佑は勝ち上帝の保護は負け。

と、天祐と上帝の保護、是同意味のみ、されど其言葉の成り立を翫味すれば、吾人は確かに或る異なるものを自覺し得るなり。

桑原先生によりて説かれたる精神力の強大が、未だ科學的の根據なしとするも、尙多くの實驗に證明せらる。實に精神界の統一は、國家に於ける無上の必要ならざらんや、其必要を知り而して我國家の特性が此統一を成就し得べき天稟ありとせば、何ぞ請ふ隗より始めんの大自覺を發せざる。

## 三十九 明治維新の鴻業

六百餘年の昔より我國家の上に晴れやらさりし雲霧が、一旦維新の風氣に吹き拂はれて、豊榮登る旭の光は直接に我國民の上に輝き來る。かゝる鴻業は上 天皇陛下の御陵威と、下も元勳各位の至誠なる參畫によれるは素よりなれども、吾人は皇運興隆の機、其來るや人力以外、眞個自然の風氣の開発あるを見る。何を以て之を謂ふ曰、維新の洪謨は其理想の高遠深奥、單に武門の治を王朝に復すの目的にあらず。又大化革新の時の如く外國模倣のみの方針にあらず。眞に所謂王政復古にして、其精神は之を皇祖の舊に復さんとしたるにあり。

吾人は前項を草したる後、一友より境野黃洋先生の時代宗教を借讀したり。此書の中にて維新の際國教定立の議ありて、大教なるものを立てんとし、今度祭政一致、天祖以來固有之皇道、復興被爲、在云々

の布告を發せられ、次で明治二年九月「宣布大教詔」の喚發となり、

天神大祖立極垂統、列皇相承繼之述之、祭政一致云々……宜明治教以宣揚惟神之道也

と宣らせ給ひしを知れり。

嗚呼明治維新の洪謨は、啻に有形上の改革を目的とせるのみならず、實に精神上の維新をも企畫せられたりしなり、是豈高遠偉大殆ど人力以外の抱負なりしに非すや。有形上の改革は駸々として豫定以外に進歩せしに拘らず、精神方面の企畫は一蹶拋擲せられたるが如し、否拋擲せられしに非ざるも機運未だ熟せざりしなり。請ふ見よ公式の祭事は凡て神式によらるゝにあらずや、是を眞正なる我國の國教となすなり。

此國教こそ吾人の所謂純粹無雜自然的汎神論の實行なるものにして、一の偏執なく迷想なく、あらゆるものを包有攝理すべき宏寬無碍なるものなり。所謂大教なり、全一神道なり。

今日の所謂宗教なるものは、一個人に於てこそ精神の全部を支配する根本的教條なれ、國家又は社會の全般を包むには餘りに狹隘となり居れり。故に吾人は宗教の宗の字は之を社會の外に抹削し去り、之を維新洪謨の定稱通り大教と謂ふべく、而して教育も倫理も學問も自ら其一部をなすべきものなりと信ず。世の宗教家は概宗教無上の見地に立つが故に、神道儒道などは宗教としての資格乏しと貶斥しつゝ、却て此宗教の宗の字なきもの、實は遠からぬ將來に於て全く力あるものとなるべきを知らざるなり。

寄語す吾人が天の使として感謝を捧ぐる維新の元勳諸公よ。諸公の初一念は是真正の天啓にあらずして何ぞ。今や暗雲は名残なく吹き拂はれたり。されど、嗚呼されど、欽明朝以來の烟霞は社會の精神界に尙二元の陰翳を貽せるにあらずや。何ぞ有終の美を精神界の一新に顯はし給はざる。

#### 四十 教育と宗教

教育と宗教とは劃然分離すべしとは、泰西に於ける最近の思想なりと云ふ。佛國の如きは羅馬法皇の抗議あるにも拘はらず、既に其改革に着手せんとし、英國の如きも最早之を議會の問題となせりと聞く。成る程今日の成立宗教は何れの一を取るも、之を教育に混同しては到底不都合を免れず、何となれば是割れ鍋にとぢ蓋なればなり。信教の自由は文明各國の共に認むる主義なるに、一方教育の精神は各國家の主張を其國民一般に強要するものなるが故に、此二者は之を一致せしむること能はざるものなり。我國の教育の如きは最よく此新思想を實行せられたるものにして、文明國人の等しく稱賛する所なり。

然り是誠に賢明なる處置なり。今日一般の學者より必或迷信を伴ふと見られつゝある宗教は、之を教育の上に採用すべき限りに非ざるも、若し夫れ宗教の宗の字を刪りて、單に「教」若しくは「道」若しくは「大教」として、宇宙全一に合するの最大教理とせば、尙之を教育より分離するの要あるか。否此の如き

眞理は今日既に教育の目的として採用し實行せられつゝあるなり、即教育に關するの勅語是なり。

然り教育の勅語は實に大教の實踐的玉條なり。然れども今日の教育者は、此勅語の宣傳を奉行するに當り、主として泰西の教育學により、倫理道德の學を以て此大教の精神を説明し盡せりとなすものゝ如し。實に倫理學道德學は教育學に向て教育の目的を提供しつゝあり。されと夫の倫理の如きは、理論其物を教ふるも、未だ教への生きたる生命即信仰を與へざるものなり、神を説かざるものなり。神を説き信仰を説くものは必之を宗教と云ふべきか、曰否、宇宙全一に合する大教は、其源頭を必、神に置かざるべからず、孔子は之を天と謂へりき。田中智學先生曰、教育は信育ならざるべからずと、蓋多くの宗教家は何れも其所見をこゝに一にせるが如し、是大に吾人の意を得たるものなり。

夫、有神と謂ひ無神と謂ひ、一神と謂ひ多神と謂ひ、宇宙全壹の唯一物に向

て、各一側の見地より水掛論を戦はせし時代は既に過ぎ去れり。汎神論は最後の斷案として地球の圓形の認められしが如く、公平なる識者に首肯せらる。而して我國家に於ては精神の歸向點として、天照大神を奉ず。神を説かざる今日の教育學は、他國はとにかく我國家に於ける教育の完全無缺を確保すべからざるが如し。

世界のあらゆる教、あらゆる思想を合成して之を以て大教となし、之を其國の教育に施し精神界の統一を計るは、球上獨り我國家のみ此模範を示すべき資格あるものにして、之を他の邦家に望むべからず。如何に先進文明の國なりと雖も、此天職は天の與へざるに得ること能はざるなり。

今日の宗教を以てしては必、之を教育より分離せざるべからず。されと教育は宇宙全一に合するを要求す。宗教なる寄生物に或場所を壅塞せられて、自ら一方に偏屈するは是教育の不具なる所以にして、學校教育と社會教育との扞格を生じ、學校と家庭と精神上の關聯を妨げ、教育者は信仰上の箴口令に

屏息して、永久に一の機械に了るの外なきのみ、維新以前の教育が師弟間に美しき習風ありしは、其の學問が幾分の信仰を含みたりしによるにあらずや。

大教合成の力なき他國に於ては、宗教教育の分離も止むを得ざる次第なれども、我國家の天性を自覺せば、かゝる不自由を忍ぶの要何處にかある。憚る所なく大教の精神によりて眞正なる國民教育を施すべきのみ。之を顧みずして徒に教育宗教分離論に得々たるは、譬へは他人の跛に倣て健足を以て尙跛行するが如きのみ。

#### 四十一 軍隊の精神教育

軍隊は國家の骨髄なり。軍隊の精神は譬へは脊髄のそれの如く全く首腦の精神に一致せざるべからず。茲に於てか軍隊の精神教育は大に國家の注意すべき所なるを知る。

此精神  
而實行之  
何所憚之  
有

信仰自由は憲法に保障せらる。然り信仰は決して之を強ゆべからずと雖も。然も軍隊布教は國家の權能に屬せざるべからず。現今の軍隊布教は主として佛教に依れるもの、如し。是果して適當なる方法なりや。佛教は因習の久しき陰的、消極的、不活動的、教相となり居れることは既に述べたる所なり。彼よく大活動を任務とせる今日の軍人に精神を興へ得るか。或は不動如山の禪的養心法を教ふるもあるべし。大死一番の覺悟を興へもすべし。念佛に安心歸命の觀念を授けもすべし。左れど此等の多くは唯對象の如何に關係なき精神修養の方法に屬するのみ。全く靈の力を奮起すべき一般軍人の正依として、如來至上の信念を保たしめんことは、今日は到底思束なきことなり。死に臨んで、天皇陛下萬歳を唱へて笑て暝する大和男子は、其心の歸向點は全く現神たる、大元帥陛下及祖宗の神靈、概言すれば、天照大神を除きて、外に何物もあるべきにあらずるなり。

今回の戦役に於ても、僧侶布教の價値は多くの兵士に按外認められさりしが

如し。中には其説教を聞くを厭ひたるも多かりしと云ふ。常陸丸戦死聯隊長須知中佐曾て曰く、軍隊教育の精神は我國に於ては主として神道によらざるべからずと。然り我國の國教によらざるべからず、靖國神社は吾人の最後に安んずべき所なればなり。

左れど今の神道家は布教の上に活動の見るべきもの乏し。之れ神道も從來の如く各派各會統一する處なき有様にては、到底我國家の精神を發揮することを得べからず。今や機運は熟せり、一躍して全一神道の協會を組織し、以てあらゆる教旨を融合して、此軍隊布教の任務を引受くべし。當局者も亦大に之を翼賛して、以て精神統一の第一步を固くせざるべからず。監獄の教誨事業、亦全一神道の協會に負擔せられざるべからず。

#### 四十二 武士道とは何ぞや

開國以來駸々たる國運を發展して、古今の歴史上に類ひなき長足の進歩をな

#### 確論

したる我國性を研究することは、夙に泰西具眼者の務むる所にして、一部人士は早くも我武士道を認めて、之を以て我國性の根本を解釋したりとなす。而して我國の學者中にも之を首肯するもの多きが如し。然り武士道は確かに我國性の一大産物なり、然れども武士道は決して我國性の全部にはあらざるなり。

我國性は所謂神隨に發達したる自然の道にして、之を稱して神道と謂ふべきも、今の所謂神道家の所説其儘のものにあらず。此國性や言語文字の以外に於て、現今我國家の實際に現はれたる自然の姿是のみ、かの武士道は唯其一方面に見えたるもののみ。

吾人の三寶は佛法僧にあらずして、實に三種の神器にあるなり。三理の神器は國祖の神の言語文字の以外に於て、自然に垂示し給へる天啓の三達德……智仁勇の御教にして、何れの教理何れの哲學を以て解説するも、人道の極致は此外に存することなきものなり。其教や既に自然なり、之を自然に奉じた

る吾人祖先は、何れの方面にも可ならざる所なしと雖も、中世以降武門の全盛なりしと共に、鏡璽の二方面よりも寧ろ、劍的方面に於て大に其發展を遂げたるものなり、此に於てか武士道として最明瞭に認識せらるゝに至れり。吾人故に曰く、武士道は我國家の精神即神道の一大所産のみと。武士道は實に吾人の所謂全壹神道の未だ完からざるものなり、我國家の精神たる大和魂が、儒道及佛道の精粹を吸収して、尙武の方面に鍛煉精成せられたるものす。武士道叢論の目次中には、重野安繹先生が武士道は中臣物部二氏より始まりと論せられたるものあり。吾人は其内容を聞くを得ざるを憾みとすれど、此題目によりて想像すれば、其先づ我心を得たるものなることは疑ふ所なきなり。

吾人も誠に武士道を尊重す。されども我國性は尙、武士道以上に一層の大なるものあり、神道是なり、全一神道是なり。

### 四十三 世界的教義 (一)

今の宗教の廣く宣傳せらるゝに當り、第一の要とする所のものは其教義の世界的なるに在り。神道は我國體の精華として我國家を支持するに適せりと雖も、到底之を世界に向て宣布し得べきにあらず。之れ神道の宗教的第一資格を缺如せる所以にして、唯我國家に於ける一の儀式にして宗教にあらずとは、多くの宗教家の等しく認めたる所にして、神道家中にも自ら之を然りとせるものあるが如し。

普通の神道家の所謂神道は、實に此世界共通的教義なきものなり。然れども所謂全壹神道も亦此世界的の教義あらざるか。否、全壹神道は實に宇宙全壹に合す、況んや世界をや。

天照大神は我國民の精神的歸向點として、宇宙の大自然に一致せりと認むる所なるも、他の國家に於ては無關係なるにあらずや。曰然り、然れども他國



人も眞の神を信仰せり。天照大神は眞の神と一體無二なるのみ、吾人の「天照大神」と稱へ奉るは實に「誠の神」と稱ふるに外ならず、唯之を美稱せるまでのことなり、眞神たる大神の道、豈之を世界に向て宣傳し得られずとせんや。

且夫多くの宗教最後の理想は、勢其教主を中心とせる精神的王國を建立して、世間の墻壁を撤廢するを期するに至らしめしなり。耶蘇教は曾て羅馬法王を中心として之を企て、遂に成らざりき。マホメット教亦中途にして瓦解したりき。今や佛教の僅に西藏に於て之を現實にせるあるのみ。抑同一の眞神を信じ同一の教主を奉じたる兄弟の間に於て、何の惡戯か國家の墻壁を高くし、大砲軍艦を飾り兵器の爪牙を磨くぞや。見るべし宗教無上は全く宗教家の空夢に外ならず、眞誠の神の意は、各人に各其國家を經營し、其國家の主腦を通じて神を見しむるにあることを。論より證據現在の球上を見よ、自然は益各國家の色彩を鮮明にし、而して各君主は多く其國家に於ける教長の資格を

帶びて、政祭一途の方針を採用せることを。今の世界に於て行く／＼各國家の墻壁を撤し、球上一帶平和の黄金世界を作らんとするは、是全く痴人の夢のみ。太陽系は何故に多くの遊星を列するならん、天空は何故に多くの恒星を排列せるならん、吾人は其理由を知ること能はざれども、自然は自然の必要によりて自然の結果を呈せしは疑ふべからず。

夫此の如く各國家の成立既に神の意なれば、國家に屬せる各人は、各其國家の精神を通じて神を信ぜざるべからず、其國家以外の或物に其心身の全部を獻ずるは、十字軍的未開時代は兎に角、之を今日の教理となすべきものにあらざるなり。之を眞正なる國家至上説となす、此道や是眞正なる神の道たるなり。

我神道は、かゝる自然なる國家至上説の説明なり、曰、忠君なれ、愛國なれと。而してあらゆる公德私徳は素より、自由、平等、博愛、正義凡て此第一義より流出し來るなり。此道や一切の迷信を容れざる外、凡ての教理凡ての學問、

凡ての人格、凡ての思想を溶融收受して之を包有す。國家的絶對の凝集力なりと雖も、同時に世界に眞正の平和を出すは、此道を措て他に求むべからざるなり。

或は謂はん、忠君とは自由思想の發達せる國民の解し得ざる思想なりと。然り忠君とは全く忠主權のことなり、如何に自由の發達せるものも、忠主權は其最後の信仰ならざるべからず、謂はずや君權（主權）は神權なりと。

夫萬世一系一種族の發達を完くして忠孝一致なる我國體は、是、天の我國家に命じたる精神統一の先鋒たるべき辭令とも見らるべきものなれども、他の各邦と雖も今日儼然一國の體面を具するものは、假令革命相繼ぎたる歴史あるにせよ、是亦其儘に神の命なり、其國民は恩怨凡て之を忘れて其國家に忠なるべきなり、眞の神は此の如きを命ずるのみ。

もろこしの山の彼方に起つ雲は

こゝにたく火の烟なりけり。

其國家に忠なるは直に世界に盡すものなり、天照る神に感謝するものなり、此の如くにして全一神道は豈世界各国に向て傳道するの能力なしと謂ふべけんや。聖勅に所謂、

之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ

なるもの、吾人實に其千歲に仰ぐべきを知るなり。

#### 四十四 世界的教義 (二)

黒住翁曰宇宙は大天地にして人は小天地なりと。此思想は疾くより東西の賢哲によりて唱破されたる所なるが、吾人は之に加ふるに更に國家を以てせんとするものなり。實に國家は大なる個人にして個人は小なる國家なり。故に個人を律するの道は、亦國家を律するの道ならざるべからず、而して共に宇宙の精神に一致せざるべからず。

宇宙の精神は生々たる化育のみ。所謂仁のみ、愛のみ、慈悲のみ、國家の目

的豈此外に出つべけんや。即内は其國家組成の個人に對して幸福を保護し、外は世界列國に向て自他共存の平和を計らざるべからず。曰、己の欲する所之を人に施し、己の欲せざる所之を人も施すこと勿れ。曰、汝等互に相愛すべしと。之れ個人道德の最上なるものなりと同時に、又國家の行爲ならざるべからず。此の如くにして吾人は夫の國家に於ける侵略主義を排せざるべからず。實に國家に於ける侵略主義は、個人に於ける害他の行爲なり、人衆きときは天に勝つも天定まれば復能く人に勝つ、害他主義は一時の成功をば成し遂げ得んも、其究竟は唯自滅を基するのみ。

故井上梧陰先生は、曾て我國語の「知るしめす」(統治)と「うしはぐ」(占領)との別を述べて、我國家の精神を明かにせられたりき。實に「知るしめす」は全く天人の一致を意味す。天人の一致は是れ世界に於ける最大の強者たるなり。或は國際間の行爲は個人相互の道德を以て律すべからず。國際間には正義以上で政畧權謀の必要を唱ふるものあり。然りと雖是誤解のみ。正直は最上の

政畧なりとは、個人間のみならず國際間にも等しく眞なるのみ、權謀術數を唯一の手段とし、傲慢不遜自ら高しとするものをして肆に濶歩せしめよ、彼唯火賭るより明かなる悔悟に向て驕然盲進するものなるのみ。我全壹神道の世界的なるは、其個人相互の間に於ける教條を移して、更に之を國家相互に及ぼし、各個人は其國家無上の信念に立ちつゝ、其國家をして各宇宙の神に一致せしむるにあり、是他の各教に於けるよりも更に大に世界的なるに非ずや。

今の宗教に於て世界的なりと謂ふは、國家に關係なき或教祖の人格と教條とを崇拜して、一般人類に共通せる良心と罪惡との不斷の戦争に、平和の福音を齎らすにあり。個人單位の見地に於ては是亦可ならざるに非ず、左れど大なる個人即國家を救済するは、かゝる教義のみにては未だ完からざるなり、釋迦を産したる印度を見よ、耶穌を生じたる猶太を見よ、釋種の遺族もモーゼの餘裔も、今や各正義の救済を他の邦家に向て叫喚せるにあらずや。殊に

かゝる教義の餘弊としては、極端なる社會主義及無政府的迷信の發生を止むるべからざるのみ。

此の如く一の人格、一の教理を以てしては、十人十種なる個人信仰をば支へ得んも、多くの個人を包有せる國家の信仰を保ち得べからず。國家は宇宙の神が。孔子と云ひ、釋迦と云ひ、耶穌と云ひ、ソクラテス、カントと云ふが如く、多くの教祖を生じたと同じく、あらゆる人格あらゆる教理の一切を包有攝理して、採長補短細大漏らさざる、即唯一にあらずして全壹なる大教によりて護持せられざるべからず。

我神道は自然に發達せし此大教なるものなり。此大教を奉ずるものは、同時に耶穌を奉じ釋迦を奉じ孔子を奉じ、哲學科學を奉じ、所謂多くの教祖を有し得べきなり。其教義の世界的宇宙的なる豈之に加ふるものあらんや。故に曰、是真神たる大神の道なりと。

#### 四十五 全壹神道の布教法

現今の成立宗教の中に於て、其布教法の最進歩完全せるものは、耶穌教の右に出づるものなし。全一神道の布教法は、主として此耶穌教に學ばざるべからず。

全壹神道は特撰せる聖書を有すべし。汎神の見地に於ては凡てのものは皆我聖書なり。されど日々心霊の修養を務むるに當りては、必、特撰せる聖書なかるべからず。其材料は主として我國家の精神(特に黑住教を重くす)及三聖並に各使徒の言行を始め、東西賢哲の言行、忠愛の事蹟中より纂録せられざるべからず。

祭神の儀式は重く古禮を保存すべきも、人と神との結合方法たる祈禱の如きは、主として耶穌教に則らざるべからず。

偶像は之を信仰の對象とせざるも、吾國家に於ける神社及御親影の如きは、

吾人の敬虔を捧ぐる所なり。反復言、即祝詞若しくは專念的復唱及禪定の方法の如きは、吾人は信仰治療の催眠術的價值、及精神修養の一方たるを認む。協會の組織、傳道上の事業經營、説教、讚美歌、此等の多くは亦耶蘇教に學ばざるべからず。

大なる教祖は特に其日を紀念するもよし。

#### 四十六 大教の綱領

全壹神道の實踐的條規は、謂ふまでもなく教育に關する勅語是なり。

#### 四十七 大教の宣傳に就て

大教宣傳の第一着歩は、之を學校教員諸君に托せざるべからず、即教師は其學校と家庭との連絡、及精神上の一致、社會教育の手段として、祝祭日の儀式に於ける説教は固より、時々校下の各部に就きて勅語説教を開催し、全壹

神道の思想によりて説明を與ふべし。今や教育者の口は故らに宗教上の事柄を言ふを避く。然れども全壹神道に於ては、決して此等の遠慮なきことなり。凡ての教を皆各善きものとして、更に之を合せて我國体の淵源を説くものなり、釋迦曰、耶蘇曰、を孔子曰と同様に使用するを得るなり、況んや、かくして一切の迷信を救はるゝをや。

學政の局に當れる各位は果して右の實行に異存なかるべきや否や。然かも吾人は吾人の腹藏なき希望を述べれば、學校に於ける儀式及朝禮には校長によりて、天照大神に對する祈禱(耶蘇教的方法による)を捧ぐるを得んこと是なり。今や學生風紀の廢頹は、天下の共に憂ふる所なり。兒童の腦中に神人接觸の良習慣を與ふるは、青年時代に於て大に信仰の花を開くべき素因ならざらんや。即學生風紀の矯正に對する根本的の一良法たらずとせんや。況んや信仰の缺乏は、今日教育に於ける一大缺陷なるをや。

## 四十八 自省

燈臺下暗くして、却て他方の人によりて手許の事情を看破せらるゝは世の習なり。我國今や國運頓に進み、世界各國の視聽は一に我國情の注意に集らんとす。泰西の人士眼光甚精細なり。近時新聞紙上に傳へられたる所を以て見ると、萬國倫理學會員の意見と云ひ、英公使の道德輸出説と云ひ、俱に我國性に對する觀察研究の、他國の學者有力者に努められつゝあるを示す。吾人もし此新に來りし平和に酔ひ、徒に尊耳卑目、内自ら省ることなからんには、或は月夜に釜を抜かるゝの古諺の如く、他の注意に驚て馬條を緊むるの笑を受くることなきを保せず。吾人の之を言ふは元其器にあらず、元其地位にあらざるも、一片耿々の心自ら止む能はず、不謹慎なる信仰の告白をなすに至れり。茲に謹で多罪を 天照大神に謝し奉ると爾云ふ。

## 餘論

○或は曰はん、全壹神道も亦は一箇の宗教のみと。然り宗教なり、宗教の上の宗教なり。然れども宗教なる語は餘りに使ひ傷はれて、弊害多くなり居るなり。

○我國人の眼にはトラホーム病多しと云ふ。是甚遺憾なることなり。されども我國人の心眼は、更に多くのトラホームを患へり。其原因は全く佛教に於て過度に燻ぶせる線香の烟によるなり。

○新鮮にして且熱心なる耶蘇教信者は、我國の精神界を征服して最理想的なる「神國」を新設せんとすと唱ふ、諸君よ、我國は是名詮自稱の「神國」にあらず、此「神國」の鏡は、は今や烟に燻ぶされ塵に汚されて、其固有の光明を隠せりと雖も、之を清拭研磨すれば、元の天成麗質なる「神國」とならざらんや。イブセンの所謂第三王國は全此「神國」なるのみ。諸君は之に満足し能はざるか、

此論亦確  
言々句々  
覺有味

之に満足せずして更に別箇の「神國」を建設せんか、是れ日本神國の二重意識を造るもの、即我國の精神を病的のものとなすと知らずや。

此事之實  
乎現豈可疑

○吾人は信ず、我國目下の精神界は全く第二の窟戸隱なり、六合晦冥にして百鬼縦横す。今や群神は安の河原の會議を終りて、窟前の歌舞其準備既に成れり。天手力雄命果して何處にか在る。彼が渾身の怪力、頑石を轉ばし來らんとき、アナ面白の聲と共に仰き見べきは、矢張開闢當時の天照大神なるのみ。歴史は今やこゝに絶大なる同事の反復をなさんとす。

○精神界最後の對抗は、全く次の如き式に約せらるゝに至るべし。

(五〇九) .. (六十世)

而して赤十字は、終に必、日の丸に包容せらるべし、疑はゞ之を同徑に畫きて重ね試みよ。

○全壹神道は、全く我國體即是なり。

○昔者日蓮上人は、立正安國論を草して之を時の當局者に呈したり。吾人の

著者有此  
大抱負可  
欽可愛

全壹神道論、亦今日の立正安國論ならざらんや、

## 附録

### ○教育勅語祭設定の議に就て

明治三十九年十月因伯教育大會に於て、我縣岩美郡提出の本問題に關し、予は反對演説の通告をなし置きたれども、發言の指定を得ざりしを以て、縣教育雜誌上にザツト意見を發表したり。

吾人の敬愛する岩美郡の兄弟諸君が、豫て教育の實際的方面に非常なる發展をせられてある一方に又教育の靈的方面に於ても多大なる自覺を葆たれてあることは、吾人の常に認めて欽慕に堪えぬ所であります。今回の問題も全く之に基くことと信じます。然るに吾人は遺憾ながら之に反對せざるを得ぬと云ふ其理由は、

抑、精神よりして形式に形式にと下り行くのは、それが世に所謂迷信的事項の多く生じたる所以であつて。今日我教育の目的は現今の世に存する幾多の不自然なる形式を超越し又超越して、最自然なる形式のみを保存し維持しつつ、勅語の紙でなく文字でなく、唯此御文章によりて宣らせ給へる斯道、即皇祖皇宗の御遺訓、而してそれが不思議にも泰西文明の教育に關する最高理想と、全然否



より以上に一致せる、宗教の上の宗教である我國家固有の大道（既に儒教の精神を溶解し佛教の精神をも吸収し遠からぬ將來に於て耶蘇教の精神をも溶解し盡すべき）の精神の鏡を磨きに磨き研ぎに研ぐべきであります。かゝる見地に立つときは今日現行の三大節始め多くの祝祭日は、それが皆一々に生きたる勅語祭ではありませんか、尙何ぞ別に新なる一形式を設定する必要あらんやであります。

況んや今日は世の極端なる思想者流が、此勅語に對し奉りてすら放縱なる議論をも仕兼ねまじき有様でありますのに、本題の如くするのは之を崇拜せんとして却て累を及ぼすの恐があると信ずるのであります。吾人は岩美郡の賢明なる各位の誠意を諒すると共に、更に一再の御熟考を祈るものであります。

### ○教育勅語身讀論

明治四十年四月末我郡教育會に於て演べたる愚見（教育學術界所載）

風替りの題目を掲げて述べますが、身讀とは諸君も御承知の日蓮上人の法華經身讀から取つたのです。かの日蓮上人……最熱烈なる宗教を打ち立てた所の日蓮上人は、佛經中の法華經を以て無上の經典、真理の極點であると見たからして、此法華經に同化するものは即真理に同化するのであると云ふ意味から、自ら法華經の行者と名乗り、且其最高弟たる日朗上人に與ふる手紙の中にも、日

朗の造詣を稱して御身は法華經を色身二讀せられて居るから頼もしいと云つて居る。此色讀と云ふのは全く法華經を形式的によく讀みたること、身讀とは自身此法華經の趣旨を實行して心身共に之に同化して居ると云ふのである。實に身讀とは奇警なる言ひ方であるが、是は實際面白い言葉である。

今日我々教育者……教育勅語信奉の下に日々此神聖なる教育の業務に従事しつゝある教育者は、云ふ迄もなく此教育勅語を以て經典の上の經典、宇宙無上の金科玉條であるとして居るからには、之に對する態度が決して日蓮上人の熱誠に一着を輸すべきでない。吾々はかく信ずるが故に此教育勅語の身讀と云ふことは、教育者の第一必要條件即根本條件であると信ずるのであります。

先頃も某先生の教育は學にあらざして術なりと云ふ議論があつた。教育は他の科學の應用などは違つて、重に教師其人によるので決して或一定の理論の拘子定規には行かぬ。素より理論研究の必要も無限ではあるが、所謂最高の技術である所の教育の仕事は、萬口一齊教師其人の人格によりて成否を決すると云ふのではないか。人格高き人の教育は譬へば牝鶏が卵を孵へす様で、休眠状態のものが生々と生命をもつて来る。是は誠に其筈である人格の高き程愛の温度が高いからである。此に至つては教育は全く術にあらざして徳化であると言はねはならぬ。近來世の青年中に靈的希求が著しく上昇して來て、之を得ないものは無暗に厭世の悲幕を演じ、一方に於て學校教育其物の効

果か此點に於て甚索然たるものであると云ふことが暴露して來た。宇宙無上の經典たる勅語の洗禮を多年間蒙つて居る學生が、學校の門を出るや出ずに此有様とは何だ。が實に是は別に怪しむべきではないのである。今日此勅語の宣傳を奉行する教師其人は、果して日蓮上人に耻ぢざる意氣を以て此勅語の身讀をなせる人の多きや否や。勅語不身讀の教師の下に同じく不身讀の學生が出るのは固より當り前である、不思議はないのである。

抑教育の目的は諸大家の所説言ひ方は様々であるが、森岡先生の「教育は箇人性と社會心とが調和的に發達して理想に流れず實地に迂ならざる人を造るを目的とす」と云はれたるに歸着する。かの生徒の自治心及協同心を養ひ之を貫くに奉公心を以てすると云ふも同じことだ。兎に角教育の理想は完全なる人格を以て完全なる人格を養成するのであるが、此完全なる人格は自他に對する思想行為の圓滿を意味する。即對自對他の鹽梅を程よく調和する所に道德的生活の完成は出来るのである。これに就て先頃加藤博士は「自然界の矛盾と進化」とか云ふ書物をお著しになつて生物進化の道行から歸納し來つて、人は天性自愛的のものであつて愛他は自愛の變形である、愛他の行為は自己に満足を與へるからするので、是亦大なる自愛であると説かれたさうである。遺憾にも未だ此書を見ぬので委細は知らぬが、新聞雜誌に之を批評したるものを見るになか／＼攻撃して居る人が多い。其攻撃論は鐵は何程磨いても金にはならぬ自愛の變形より他愛は來らぬとか、他愛は自愛の變形であ

るにしても今日は兩傾向が並立し得るに至つて居るのであるから、矢張從來の通りに人には自愛心と愛他心とが本性に存するとするが正理であると云ふにある様である。戻らぬ差出口ではあるが吾人はかく反對論あるにも拘らず加藤博士の説を賛成するのである。人間は實に自愛の動物である、否自愛は天理である、自愛のみで澤山であるが。此議論の有様で考へて見れば、加藤博士の書中には少し説き方の足らぬ處があつたてはあるまいか、即「我」の進化と云ふことが説いてないてはあるまいか、果して然りとすれば進化論の大家たる博士の議論として大に惜まざるを得ない。

吾人は眞理を以て自愛のみとする一方に於て、大に此「我」の進化を認めるのである。抑宇宙間の生物か其形態上の進化に於ては、今や殆ど人類を以て極點として居る。此先どうなるか知らぬが此縦鼻横目立行の人體は、耶穌教家は神が神に似せて作つたとまで謂ふ位に達してゐる。けれども進化の作用は少しも休止せないからして、今形態上の一段落期なれども、進化の手は人類の心に作用して殊に其智力に於て著しく、且人の自覺即此「自我」と云ふものゝ進化を催進する最中である。ちよつと我人が反省しても吾人が小兒の時には殆ど空々漠々で、それから漸次自身一己の「我」となり、少しく進むと子としての「我」を考へ、兄として弟として一家の一員として、遂には一家の主人たる「我」となり、職務を帯びたる今日に於ては一小學校長としての「我」を考ふるに至つたのである。職務上にはそれであるが、内省法によりて國家の「我」社會の「我」を認識し、遂に宇宙の「大なる我」に

到着して茲に「我」の進化の極點に止るのである。

之る譬へて言つて見れば茲に一本の樹木があつて、其綠葉が茂り合つて居る時に、もし此木の一の枝に付着せる某葉自身が自我であると信じて居るときには、隣の葉たちは他人であるから衝突すれば腹も立ち怨恨忌嫉も起るのであるが、此葉の知識が向上して其自我を進化せしめ、己の付着せる枝を單位として之を「我」と考ふる時には、此枝に付着する多く葉に、どこに他人が見えまするか。實に是一體平等の自體であつて兄弟どころの騒でない。更に此枝より一步の向上をなして樹木全體の「我」を悟了すれば、葉にも枝にも根にも皆他人と云ふものがなくなる。斯様な工合であるから最も大なる我に立つものは一大自愛で澤山である。かの我他彼此の分界が窮屈であつて惡意的競争や煩悶に驅られ、何でも無いことに直ぐ不平を起し打ち腹立つ人は、其人の「我」の程度が低い。證據であつて誠に氣の毒の至りである。又如何に小さき「我」に固定せる人であつても、時と場合によりて大に愛他の心情を發することのあるのは、其瞬間に知らず／＼心の深底の高き自我が發現せるものであつて、所謂鬼の目にも涙……此涙の出る時には彼は決して鬼ではないのである。

偕、議論が至て横道に這入た様であるが、實は本論の勅語身讀は換言すれば「我」の擴張即進化……大我に合する……グリーンの所謂自我の實現である。こゝまで行かねば身讀したにはならないこゝに至れば自然に個人性と社會との調和發達となり自治共同奉公の融和統合となりて、十方無碍

唯樂しむべきが見えて餘事は更に無い。此眞樂境に於ては實に有り難くて有り難くてたまらぬ中心核子が現前する。即勅語に所謂「皇祖皇宗」一言以て之を表せば曰、天照大神是である。此境界から四方を見渡せば坦たり蕩たり、所謂悠久の天地平和の自然事々一切は無碍である。他人の憂は是我憂て他人の樂は是我樂である。然ら是一切無差別で精神上に於ける極端なる社會主義かと云へば決してさうでない。此平等界の中心核子の光明遍照十方に發射する大光線に照らされて、金色鮮かに輝く天空の文章を仰げは則ち

「爾臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ、恭儉己ヲ持シ、博愛衆ニ及ボン云々」

が、自體の外とも云へず内とも云へざる所に讀まるるのである。之を勅語の身讀と云ふと信ずるのであります。

以上吾人は洵に口廣きことを吹き立てた様であります。所謂賢ト者身の上知らず、又言ふは易く行ふは難して、自ら我身を願れば實に慚愧に堪へないのであります。唯諸君と共に之を努めたいと思ふので清聽を汚した次第であります。

○近藤雄四郎君を吊す (明治四十年五月三十日)

櫻の花心なき夕の風に散りて、紫の藤波も人の眺めを辭し去りし山の青葉の木がくれに、ほととぎ

す血に啼く今日此頃は、さらだに人の心のうら哀しきを、コハ又何事ぞや、我大恩ある近藤雄四郎の君、去年九月御發病以來、有りとあらゆる人の心と力とを盡しに盡せし甲斐なくて、英魂空しく幽界に向て旅立ち給ひ、高風再び仰ぐに由なく、清談今はた聞くにすべなからんとは、嗚呼無常！、實に此人世の悲みを如何せん。

忘れもせぬ一昨年秋、或日御内に伺ひたるに、止めさせ給ひしまゝ長居して晩酌のち側に侍りしをり君しみくくと語り給ふ様、田貝よ予も年老ひたれとも、幸に身體は益健かにて近來は殊に元氣よくコレ此通りなりと腕を示し給ふを見れば、げによく肉付給ひて、胃の弱き我等には耻かしきまで太り給ふを見て喜びに堪えざりしに、一年立ちてかゝる重き病を受け給はんとは誰か思ひ設けんや君のいたつきは世にも恐ろしき食道の癌腫なりしと云ふ。内臓の癌腫は今日に於て不治の重患とせらる。嗚呼英氣内に充ち、物に屈し給はぬ御性質なりしと云へども、此病患をば如何にし給はんや。殘惜しき事々の一切を抛ちて、長き眠に就き給ひしことの、如何に御無念なりしならんことよ。

想ふ、去年の夏は我母も亦此癌腫の爲めに斃れにき。母も一昨年春の頃には、いつになく身體の丈夫になりしを覺ゆと云へりしに、其夏より發病せしを見れば、或は癌腫の始めには、あだじしのと云ふことあるものによ。子宮癌には腰氣のかほり高きもの、由なるに、當人も我等も醫者に聞くまで知らずに過ぎて、アタラ治療の手後れとなりしは、千秋の遺憾忘るゝ時は之れ無く。ヤオレ

癌腫と癌腫。汝去年は我母を斃し今又我恩人を奪ひ去れり。母の敵恩人の仇なるのみならず、天下知名の士の汝の爲めに斃るゝもの幾何なるを知らず。汝は實に人間の公敵なり。社會進歩の前途に於て豈汝を絶滅せずして止まんやは。

吾幼少より不幸にして父と一と所に暮すこと能はず。十二三歳の頃亡き君は我を憐み給ひて、家に置きて養ひ得させ給ひたり。吾誠に我儘に人となりて、使ひ勝手の悪しかりしならんをも厭はせられず、御夫婦共に情をかけられて、盆節季には我家の困難を察せられ、思ひ設けぬ金品を惠み給ひてければ、其度毎に亡き祖父や亡き母が喜び合へりしこと、今も尙忘るゝこと能はず。アハレ一期の間には何がな御恩報じの仕ぐさもと、心掛け侍りしことも水の泡なれや、魯鈍の性質は、遂に御生前に於てこれとて御心を慰めたることもなく、却て御厄介の多かりしのみ。是我一身上に於ける無限の痛恨、吁亡き君は知り給はずや。

これや今生に於て永の訣れに候へば、言の葉の少しく長きに亘るを免させ給へよや。黒住宗忠翁曰「吾我れと思ふこの身も天の我れ、我物とては一物もなし」と。誠に誰人も吾「我」なりと思ふ此身がらなれども、此身も實は假りの入物にして、誰もいつかは此入物を返すべき時來るべし。されど此入物に宿りたる此「我」と云ふものは、元々天地一杯のものにして、肉身の生き死は決して此「我」に傷つくるものにあらず。素より死にたるものゝ物思ふことはなきことなれども、誠の「我」は生き死

の外に立ちて、世の始めより世の終るまで變りなきこと、譬へは川の水は變れども川の姿はいつまでも變りなきが如し。

世の人の知るべきことを知らぬかな

親も我子も我身なりとは。

と貴き人の詠じけん。げに親も我子も我身に相違なく。更に之を廣げて言へは、一家親類は皆我身にして、國家全體も我身なり、禽獸草木も我身なれば、世界全體我身に相違なし。此小さき肉身にかゝづらひて、「我」とは此身一代に限ると思ひ込むもの、之を迷の凡夫と云ふ。「我」とは天地一杯のものなることを悟りて、此肉身の生死が此「我」に關係なしとすることを、釋迦如來は之を不生不滅の涅槃と宣ひ、キリスト、イエスは限りなき生命に入ると宣ひ、黒住翁は生き通しと唱へられたり。皆等しく宇宙の大我に合するを云ふなり。かゝる境界に立ち得たるものを、孔子は之を至善に止ると云ひ、弘法大師は之を即身成佛と云ひ、日蓮上人は之を法華經の身讀と云ひ、親鸞上人は之を他力の安心と云ひ、イギリスのグリーンは之を自我の實現と云ふ。信心と云ひ、教育と云ひ、修養と云ひ、福音と云ふも、其名は異れども歸する所は唯此「我」を天地一杯に擴げて、神と共にあらしむるに外ならず。亡き君の御病床を見舞へる時々、信心の道の話の御相手せしに、此「我」の悟りの話をば、餘りに衰へ給へる御姿を見て、遂に申さて止みたるぞ遺憾なる。今や亡き君の御亡骸は厚

き葬儀の下にあれど、亡き君の御精神は、天照る神の御許にありて、もろ人の心の中に生き給ひ、尙其儘に御宗家の支柱として、我根雨宿の大勢力として、熱心にしかも英敏に、地方公共の爲めに御盡し遊ばさるゝこと、我根雨宿の歴史の絶えぬ限り、拭はんと欲して消ゆべけんや。英靈希くは安らげく嘆し給へよと爾云ふ。

### ○敢て兩本願寺に勸む

我國今日の教界に於ける本願寺の状態は、疑もなく精神上に於ける第二の幕末なり。

佛教の各宗各派が、互に一方に割據して各其旗幟を翻へしたるは、恰も三百諸侯のその如きが中に、巍然として一向専念他力安心の本願を標榜し、通俗簡易の不方便を以て我國多數の信仰を支配し、佛教の司命たりしものは實に本願寺の大將軍なりしなり。

浦賀一朝の外警にあらで、維新開國の其曉より滔々として流入し來りし耶蘇教によりて、三百年間夢暖かなりし積穀殿中俄に無常の風吹き荒み、信仰界の國論沸騰、處士横議、佐幕の保守說漸次其力を失ひて、信仰自由を憲法に保障せられし今日、今更鎖港攘夷の野暮も云はれず、さればとて公武合體は維新の始めに拒絶せられてければ、再び之を紹ぐべくもあらず、内憂外患進退此に窮策を按出して、國內の人心を一轉せしめんと企てられたる長州征伐に、似たりや似たり近來の支那布教！

左れど天下の大勢は既に一變せり。政治上に於ける幕府の存在が、我國運の上に許容せられざりしと同じく、精神界の幕府も亦我國運の發展上到底其存立を希ひ得べきにあらず。之を祖師の眞意に考へ、之を如來の法輪に慮り、徐に世界の機運に想到せば、眞正の佛教擁護は（精神界の華族たらしむべし）蓋し諸君今日の方便の外にあらずや。

茲に吾人は第二の土佐侯となりて、誠心誠意敢て教權返上を忠愛なる兩本願寺に勸む。

### ○讀史偶感

一、クロンウエルの鐵騎、ジャンダークの義兵向ふ所前無し。

田貝生曰、恐るべきかな精神力の強大や、而して精神の其最大力量を發揮するは、實に神の信念に立つものにより。個人然り、團體然り、況んや國家に於てをや

二、デモスセネス國民會に警告するにフリップの來冠近きにあるべきを以てせし時、反對論者エスキネスの一友之を嘲て曰、

「諸君デモスセネスと予等との思惟する所異なるを惟しむ勿れ、彼は陰鬱にして水を飲むの人なり、而して予輩は實に酒を呑むの人なり」と。

田貝生曰、大國小國は其國土の大小、民衆の多寡にあらず。實に其國民の眞面目なると否と、換言すれば信仰の状態如何に關す。

三、羅馬法皇ガリバルジを嘲て曰、海賊、狂人、人類の糟と。

田貝生曰、讀下失笑、腹の皮を縊らしめたる哉

四、アルノルド曰、大英雄は大國民に如かず。第二ブーネル役（ハンニバル）と佛國革命戦争とが之を證すと。

田貝生曰、大國民は神國民に如かず。是二十世紀以前の史家の知り能はざりし所なり。

五、第三ブーネル役羅馬の全捷に歸して、カルターゴの大都城遂に猛火の中に一片の焦土とならんとす。羅馬の總大將シッピオ（大シッピオの養孫）之を望んで喟然として歎じて曰、嗚呼羅馬もいつかは斯る運命に遭遇することあるべしと。

田貝生曰、羅馬を滅したるものは北方ゴーツの蠻人にあらず、又耶蘇教にあらずして、實に羅馬人が其國家に對し天壤無窮の信念を存せざりしにあり。此シッピオの一言の如き、明に我國運の薄弱を暴露せるのみならず、更に大に之を戕害せるものなり。

明治四十二年八月十七日印刷  
明治四十二年八月二十日發行



著者兼  
發行者

田 貝 定 太 郎

印刷人

知 野 勝 直

印刷所

東京市牛込區新小川町二丁目八番地  
明 治 商 會  
電話番町二三八五番

+++++  
定價金卅五錢  
+++++

發行所

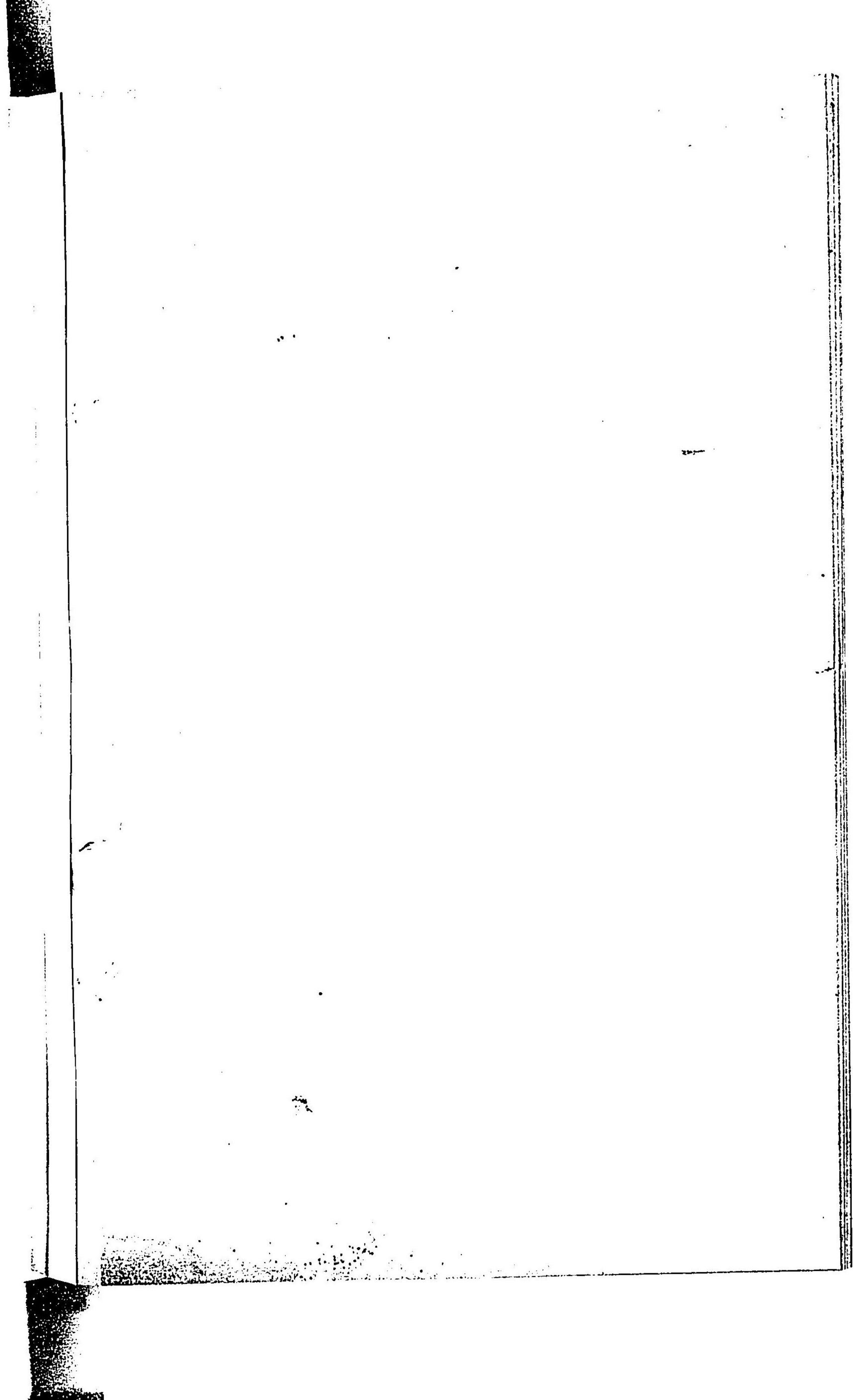
東京市芝區櫻川町六番地

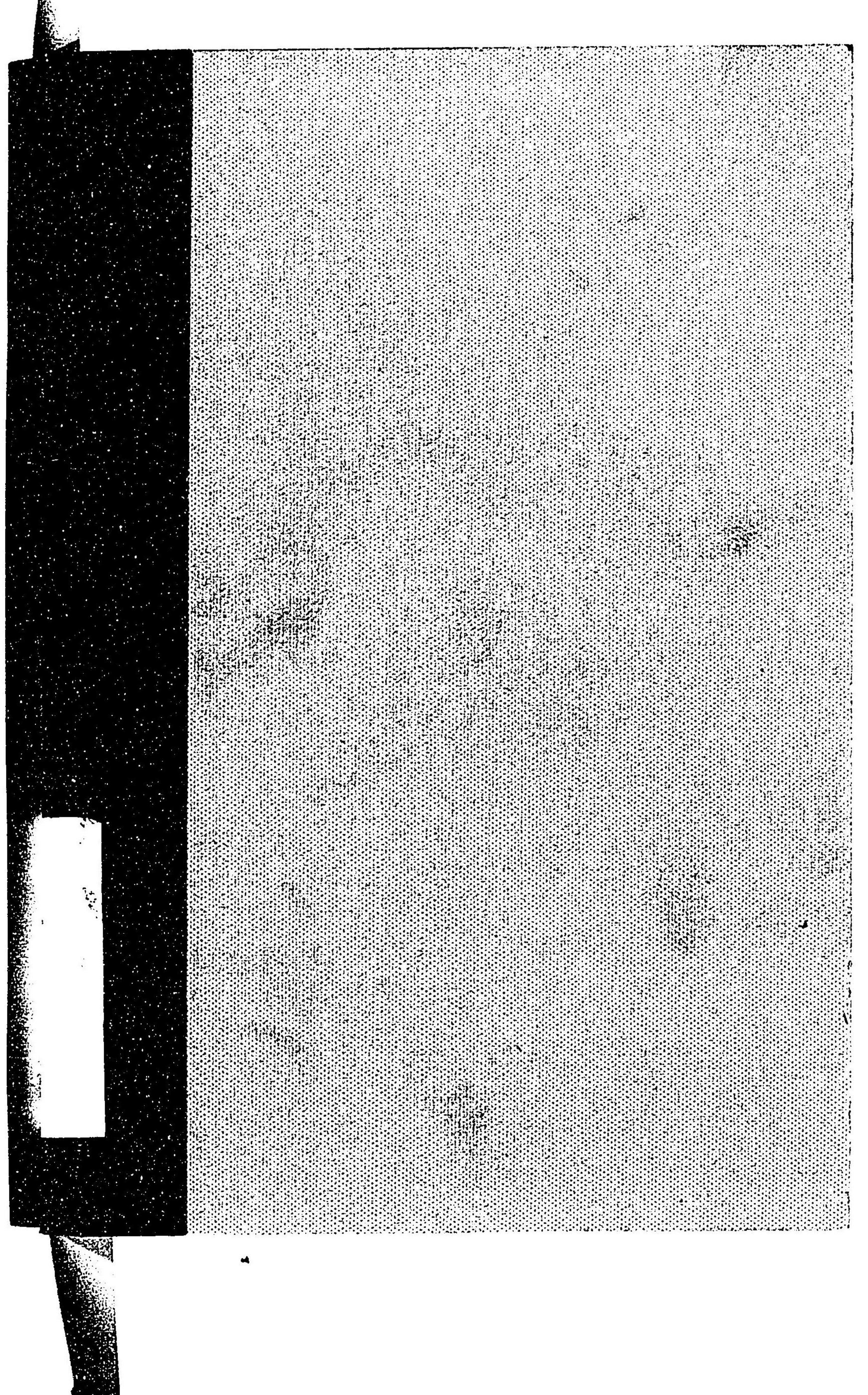
大 教 社

振替貯金口座東京壹九六參貳番

二五頁十行目	正	明治二十年	誤	明治二年
二八頁四行目	無神	無說		
三六頁十三行目	神とは	精とは		
四九頁初行	心靈の	靈の		
五三頁九行目	結集	結果		
七七頁初行	煥發	喚發		
九六頁三行目	個人の信仰	個人信仰		
九八頁六行目	綱領	綱領		







特21

584

精神界之統一

田貝定太郎

国立国会図書館

014310-000-6

特21-584

精神界之統一 一名, 全壹神道論

田貝 定太郎 / 著

M42

ABB-0653

